

源氏物語「本文と享受」の方法

岩 下 光 雄

一、「面影」の語誌と物語の享受

二、「首書源氏物語」玉鬘の巻の本文と物語の享受

三、「源氏物語の本文と享受」(和泉書院)要旨・享受をめぐる問題

一、「面影」の語誌と物語の享受

I

「おもかけ」の語を小学館の「日本国語大辞典」で調べると、

人の顔や姿、物の様子、情景などで、目の前に実体のないものをさすことが多い。①目の前にはないものが、あるように目の前に浮かぶこと。また、その姿。記憶に残っている姿。まぼろし。幻影。②顔かたち。顔つき。おもさし。

③あるものに似た姿。それらしい顔つき、様子。④姿。様子。⑤歌などで、余情として浮かんでくる姿、情景。⑥おもかけづけ(面影付)に同じ。⑦香の名。質は伽羅(きやら)。においは蘭奢に似て火末は薄い(名香目録)。

など、詳細に意味を分類している。だが①から④の分類を見ていくと、あちらこちらに意味の重なる部分がありあつて、分類していくことが無理のようにも思う。用例としてあげられたものを検討しても、そういう事実を指摘することができる。

万葉集の歌の中に用いられている「面影」の語は十三例で、「面影に見ゆ」六例、「面影にして」四例、「面影去らず」一例、「面影にかかりて」一例、「面影にのみ思ほえ」一例である。このように限られた語に限定的に続いていくこと、恋の歌や、そうした発想に関わる歌にしか用いられていないということのなかには、やはりそれだけの理由があると考えていかなければならない。万葉びとが、「面影」の語に如何なる思いを抱いていたのか、そうした発想の始原を探ることはできないだろうか。資料(1)、(3)の歌を

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず (卷二十 四三二二)

我妹子がいかに思へかぬば玉の一夜もおちず夢にし見ゆる (卷十五 三六四七)

の歌などと重ね合わせて考えていくと、発想の始原にたどりつくことができるのではないか。

片桐洋一氏(『小野小町追跡』笠間書院)が指摘されるように、万葉集には既にこれとは逆に、

思ひつつ寝ればかもとなぬば玉の一夜もおちず夢にし見ゆる (卷十五 三三三八)

という歌が存在する。この歌は、三六四七の歌に「似ており、その歌に吾妹子がとあるのを、自分の上に移しただけの相違である。平凡な歌といえよう。」(武田祐吉『万葉集全注釈』十一 角川書店 155頁)と指摘されている。こうした二つの視点から、資料の十三首の歌を読んでいくと、従来の読み方とは違う意味を読みとることができる部分が存在するし、この話の語意の分類にも、示唆するところが大きいように思う。

源氏物語には、「面影」の語が二十九例ある。その意味を分類していく作業、過程を通して、物語作者の発想のふく

らみ、物語の構成の問題を考えていくことにするが、万葉集の歌の世界の変相、変容を歌仙家集本小町集の次の一連の贈答歌のなかに重ねながら読んでいくことができるように思う。

夢に人の見えしかば

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

これを人に語りければ、「あはれなりけることかな」とある、かへし

うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき

返し

たのまじと思はむとてもいかがせむ夢よりほかにあふ夜なければ

いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞ着る (片桐洋一「小野小町追跡」笠間書院 付録 197頁)

「おもかげ」という語の語誌をたどりながら、奈良時代から平安時代へという文学的世界の展望を通して、源氏物語の享受の問題にふれてみよう。

万葉集の十三例について用例をあげる。作者を特定できるものは括弧内に矢印をつけて誰から誰への歌であるかについて示す。

(1) 七五 夜のほどろわが出でて来れば吾妹子が面へりしくし面影に見ゆ (家持↓坂上大嬢)

(2) 二六三 高円の野辺の容花面影に見えつつ妹は忘れかねつも (家持↓坂上大嬢)

(3) 三六七 敷栲の衣手離れて吾を待つとあるらむ子らは面影に見ゆ

(4) 三六三 燈の影にかがよふうつせみの妹が笑まひし面影に見ゆ

(5) 四三〇 大船の ゆくらゆくらに 面影に もとな見えつつ かく恋ひば 老いづく吾が身 けだし堪へむかも (大伴

氏坂上郎女↓女子むすめ

(6)三六 年も経ず帰り来なむと朝影に待つらむ妹し面影に見ゆ

(7)三六 陸奥むつの真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを(笠女郎↓家持)

(8)六〇三 夕さればもの思ひまさる見し人の言門ふ姿面影にして(笠女郎↓家持)

(9)二九四 立ちかはり月重なりて逢はねども実忘らえず面影にして(田辺福磨↓娘子)

(10)三三三 遠くあれば姿は見えね常の如妹が笑ひは面影にして

(11)三三四 里遠み恋ひわびにけり真澄鏡面影去らず夢に見えこそ

(12)三〇〇 吾妹子まがこが笑ひ眉引面影にかかりてもとな思ほゆるかも

(13)七五三 かくばかり面影にのみ思ほえばいかにかもせむ人目繁くて(家持↓坂上大嬢)

これらの歌を、(イ)どういう語につくか、(ロ)作者について、(ハ)歌の視点について、という三点から分類すると、次のようになる。

資料Ⅰ(万葉集)

(1)面影に見ゆ(七五三・一六三〇・三六七・三三四・三三六・四三三〇)六例 四六・二%

(2)面影にして(三九六・六〇三・一七四四・三三七)四例、三〇・八%

(3)面影去らず(二二三)面影にかゝりて(二九〇)面影にのみ思ほえ(七五三)各一例、七・七%

(ロ)(1)作者の特定できる歌・七首・五三・八%(男↓女・四首・三〇・八%・女↓男・二首・一五・四%・女↓女・一首・七・七%)

。家持↓坂上大嬢(七五三・七五三・一六三〇)三首

。田辺福磨↓娘おとめ子（二九四）一首

。笠女郎↓家持（三六・六〇）二首

。大伴氏坂上女郎↓女子むすめ（四三〇）一首

(2) 作者の特定できない歌 六首・四六・二%（男↓女・六首・四六・二%）（三〇七・三六四・三六四・三〇〇・三三三）
・三三六

(1) 相手が思っているから・思ってくれないから・（三六・三六七・三三三）三例 一一・一%

(2) 自分が思っているから・（七五・七五・六〇・一三〇・一七四・二九〇・四三〇・三六四）八例 六一・五%

(3) どちらとも断定できない・どちらかの必要もない・（三六七・三六四）二例 一五・四%

次に源氏物語の「面影」二十九例、「御面影」四例の用例をあげる。「新釈」本による。

(1) 面影につと添ひておぼさるるも、闇の現にはなほ劣りけり。（桐・一〇）

(2) 夢に見えつるかたちしたる女、面影に見えて、ふと消え失せぬ。（顔・二三）

(3) かのありし院に、この鳥の鳴きしを、いと怖しと思ひたりしさまの、面影にらうたくおもほしいでらるれば、（顔・
一五）へナシ・陽

(4) 昼の面影、心にかかりて恋しければ、「ここに物し給ふは誰にか。尋ね聞えまほしき夢を見給へしかな。今日なむ思

ひあはせつる。」（紫・二八）

(5) おもかげは身をも離れず山桜心のかぎりとめてこしかど（紫・一七）

(6) かくてのちは、内にも院にも、あからさまに参り給へる程だに、静心なく面影に恋しければ、あやしの心やと、我ながらおぼさる。（葵・三七）

(7) 道すがら面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に乗り給ひぬ。(須・三四)

(8) 「さらぬ鏡」と宣ひし面影の、げに身に添ひ給へるもかひなし。(須・二六) 〔御面影〕河・く

(9) いみじう口惜しう、夜昼面影に覚えて、堪へがたく思ひいでられ給へば、なほ忍びてや迎えまし、とおぼす。(須・

三〇)

(10) ほのかなれど、さだかに見奉りつるのみ面影に覚え給ひて、(明・六三)

(11) 「鏡を見ても」と宣ひし面影の離るる世なきを、(明・六九)

(12) かんざしおもやうの、恋ひ聞ゆる人の面影にふと覚えてめでたければ、聊か分くる御心も取りかへしつべし。(種・

三二)

(13) わりなく恋しき面影に、又あひ見でやと思ふよりほかの事なし。(少・三四) 〔御面影〕河・讚・陽・国・保

(14) 斯く人やりならぬものは思ふぞかしと、起き臥し面影にも見え給ふ。(真・三二)

(15) 見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。わが御北の方も、あはれとおぼす方こそ深けれ、いふかひあり、

すぐれたるらうくじさなど、物し給はぬ人なり。(菜上・三七)

(16) さてうちしめり、面瘦せ給へらむ御さまの面影に見奉る心地して思ひやられ給へば、げにあくがるるたまやゆきかよ

ふらむ(柏・三六)

(17) 面影忘れがたくて、兄弟の君だちよりも、強ひて悲しと覚え給ひけり。(柏・二五) 〔おもむけ〕国・く

(18) 面影に恋しう悲しさのみまされば、いかにして慰むべき心ぞと(幻・三三)

(19) ほのかに見奉りてのちは、面影に恋しう、いかにならむ折にとのみ覚ゆるも(竹・四〇五)

(20) 御けはひども面影に添ひて、なほ思ひ離れがたき世なりけりと、心弱く思ひ知らる。(橋・三二) 〔恋しかりけり〕宮

・横・保・麦・阿・「さひしかりけり」国・く

㉑常よりもわが面影に恥づる頃なれば、うとましと見給ひてむもさすがに心苦しきは、いかなるにか。(総・二四八)

㉒あなめでたの人やとのみ見え給へるを、姫君は、面影去らぬ人の御事をさへ思ひいで聞え給ふに、いとあはれと見奉り給ふ。(早・二〇四)

㉓我も物を心細く思ひ乱れ給ふにつけては、いとど常よりも面影に恋しく悲しく思ひ聞え給ふ心なれば、(宿・三三九)

㉔あいなう大將殿の御さまかたちぞ恋しう面影に見ゆ。(東・五九) へ「おもほゆる」御・保・「おもほゆる」河・く

㉕絶え果てぬ清水になどか亡き人の面影をだに留めざりけむ(東・六三)

㉖ありし御さまの、面影におぼゆれば、我ながらもうたて心憂の身やと、思ひつづけて泣きぬ。(浮・二一四)

㉗面影につと添ひて、聊かまどろめば、夢に見え給ひつつ、いとうたてあるまで覚ゆ。(浮・二三五)

㉘さりとも恋しと思ふらむかしと思しやるにも、物思ひて居たらむさまのみ、面影に見え給ふ。(浮・二三九)

㉙例の面影離れず、絶えず悲しくて、この御文を顔におしあてて、暫しはつつめども、いとみじく泣き給ふ。(浮・二五三)

(1)鼻の色にいでいと寒しと見えつる御面影、ふと思ひ出でられて、ほほ笑まれ給ふ。(末・三六二) へ「おほしたりつる

面かけ」河・陽・く

(2)をがみ給ふに、ありし御面影さやかに見え給へる、そぞろ寒きほどなり。

なき影やいかが見らむよそへつつ眺むる月も雲隠れぬる。(須・三〇)

(3)心にかけて恋しと思ふ人の御事はさしおかれて、ありつる御面影の忘れぬを、こはいかに覚ゆる心ぞ、あるまじき思ひもこそ添へ、(野分・一〇六)

(4)ほのかに見し御面影だに忘れがたし、ましてことわりぞかし、と思ひ居給へり。(幻・三三六)△「御かたち」御・▽
 これらの用例を分類して示すと、次のようになる。

資料2 (源氏物語)

(1) A・(吉沢義則「新釈」・巻名・頁数・)

B・(誰が・誰を・)

No	① 面影		No	② 御面影		校異
	A	B		A	B	
12	種・三九・	源氏・(紫上が似ている)藤壺・				①陽・国・「御面影」
11	明・充・	源氏・紫上・				
10	明・空・	源氏・(夢に)・桐壺院・				
9	須・三・	源氏・紫上・				
8	須・六・	紫上・源氏・				①河・「御面影」
7	須・四・	源氏・紫上・	2	須・三・	源氏・桐壺院・	
6	葵・三七・	源氏・紫上・	1	末・三六・	源氏・末摘花・	②河・陽・「面影」・
5	紫・一七・	源氏・(尼君に)紫上・				
4	紫・一八・	源氏・(僧都に)紫上・				
3	顔・一五・	源氏・夕顔・				①陽・「ナシ」
2	顔・三三・	源氏・物怪(女)・				
1	桐・一〇・	帝・桐壺更衣・				

□①②の合計 () (内②の内数)

A誰が・

29	浮・一壹・	浮舟・匂宮・					
28	浮・三元・	匂宮・浮舟・					
27	浮・三五・	浮舟・匂宮・					
26	浮・二四・	浮舟・匂宮・					
25	東・壹・	薫・八宮・大君・					
24	東・五・	浮舟母・薫・					①河「おほゆる」・御・保「おもほゆる」
23	宿・三九・	中君・大君・					
22	早・二四・	中君・(薫を通して)大君・					
21	総・一咫・	大君・(薫に)大君自身・					
20	橋・三・	薫・宇治姫君達・					①宮・横・保・麦・阿「恋しかり」・国「さひしかりけり」
19	竹・四壹・	少将・姉君・					
18	幻・三三・	源氏・紫上・	4	幻・三九・	夕霧・紫上・		②御「御かたち」
17	柏・一奏・	夕霧・柏木・					①国「おもむけ」
16	柏・三六・	柏木・女三宮・					
15	菜上・三六・	夕霧・紫上・					
14	真・三二・	源氏・玉鬘・					
13	少・三三・	夕霧・雲井雁・	3	野・二咫・	夕霧・紫上・		①河・讚・陽・国・保「御面影」

(1)	14 (2) 例・四二・四％ (源氏)	(4)	2 例・六・一％ (薰・中君・)
(2)	5 (2) 例・一五・二％ (夕霧)	(5)	1 例・三・〇％ (桐壺帝・紫上・柏木・少将△竹河▽・大君・浮舟母・匂宮・)
(3)	3 例・九・一％ (浮舟)		

B 誰を・

(1)	10 (2) 例・三〇・三％ (紫上)	(4)	1 例・三・〇％ (桐壺更衣・夕顔・物怪(女)・源氏・八宮・大君・藤壺・雲井雁・)
(2)	3 例・九・一％ (大君・匂宮)		玉鬘・女三宮・柏木・姉君・△竹河▽・大君・中君・薰・浮舟・(末
(3)	2 (1) 例・六・一％ (桐壺院)		摘花・)

次に、用例及びそれを分類・集計した「資料」の分析・検討を通して、源氏物語の「本文と享受」の問題を考えることにする。

万葉集の「面影」の用語例十三例中、作者の特定できる歌は七首ある。そして、これらの歌人の活躍した時代は、大伴坂上郎女を除くと、家持、笠女郎、田辺福麿らは、ことごとく万葉第四期に属する歌人達であり、家持周辺の歌人が多い。大伴坂上郎女は、坂上大嬢の母であり、第三期を代表する歌人であるとはいえ、その生存は多分に第四期にまたがる。しかも、「資料 I」によれば、三染番歌を除く六首は、すべて「自分が思っているから」の項に分類できるという点に注意する必要がある。三六番歌は、卷三の「譬喻歌」、「笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌三首」と題詞にある二番目の歌。「注釈」(澤瀉久孝・中央公論社)は、「奥州の真野の草原は遠いけれどおもかげに立って見えると申しますものを。」(第三 449頁)と現代語訳し、

思ふ人が面影にも立たないとか、人の思ってくれない事を恨んでみるとかいふ事は、明らかに誤解である。面影は夢

ではない。夢は見ようと思っても見られない。だから夢にも見えねば思ってくれないかと歎く事もあらうが、みづからの思ひが真実である以上面影に立たぬといふ事はあり得ない。真野の草原が面影に立つならば思ふ人の姿が面影に立たぬわけがない。契沖、真淵の解説がやはり最もすなほに古人の心に通ふものと言へるであらう。(452頁)

とする。面影と夢とを全く別のものとして區別しようとするのは、既に引いた万葉集の歌からも誤りである。そして古今和歌集の「ぬば玉のやみの現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」、「君や来しわれや行きけむおもほえず夢か現かねてかさめてか」などの歌が、源氏物語の引歌になったり、万葉集、古今集、古今和歌六帖などに類歌をもちながら、伊勢物語を作りだしていることには、やはり根底にそういう発想と深く関わるものが存在するからである。「全注釈」(武田祐吉 角川書店)は、

作者は、恐らくは遠く隔っておって、人の思ってくれないことを恨んでいるようである。思うならばどれほど遠くとも面影に立って見えるはずだの意味を託しているのであらう。(四 325頁)

と「評」する。この歌は、「真野の草原は遠く隔ってはいるけれど、歌枕を思い愛するとそれが面影に見える」と話に聞いていますが」と、第三句までを比喻として、「たとえ遠く隔っていてさえも」と、「全注釈」の後半の叙述に続けていくと解釈できる歌。「人の思ってくれないことを恨んでいる」歌と考えるべきだ。「注釈」は、「自分が思っているから」の歌とするが、小学館『全集』頭注に「当時は、心に思えば相手の夢や面影などに見える」と信じていた(一 253頁)とあるのに従うべきで、「いうものを」には、世の人は言いますのにといい、初期万葉には見られない知的な遊び、軽妙な戯れ、洒落の世界が秘められてもいる。このように、従来のこの歌の注釈の違いには、「相手が思っているから。思ってくれないから」、「自分が思っているから」という、視点の捉え方の相違がその根底にある。そして、世間の人の考えに、古い考え方、発想的な始原を置いて詠んでいる歌だとすれば、作者の特定できる七首の歌は、いずれも万葉第四

期の新しい発想への傾斜を、共通の基盤にもつものだと考えることができる。

次に、作者の性差について考えてみると、男の歌十首、女の歌三首となっている。女性の歌は、大伴坂上女郎、笠女郎の歌で、大伴坂上女郎は娘に、笠女郎は二首とも家持に贈った歌である。ここでも、やはり女性の側からの歌は、作者の特定できる歌であり、しかも、家持を中心とする万葉第四期に関わる歌であることがわかる。「面影」の語が、すべて「恋」の語を伴い、作者の特定できない古い歌、または新しい歌が含まれているかも知れない歌群では、すべて男性が「面影」の語を用いて歌を詠んでいる。この語が、始原的に性差にもとづく位相を表わす語であったのかどうかは、検討を加うべき問題である。だが、用語例としては、やはり位相語としての様相を示していることも事実のように思われる。

II

源氏物語の作者は、したたかな用語意識の持ち主であり、用語を操る術にきわめて長けた作家でもあった。石田穰二氏（『源氏物語論集』桜楓社）は、「こまやかに源氏物語を読む事が、日頃の私の願ひでもあり、努力の中心でもある」とされ、

歌語だけでなく、一般に源氏物語の語彙において、それぞれの語の歴史やその性格について、どれ程の事が現在わかってゐるであらうか。中古語の体系がまだ明らかでないから、その中に位置を占める源氏物語の語彙体系の性格もまだ明らかでないのは、当然の事と言へば言へる。その中でも、歌語と考へられる言葉は、まだ、性格のはっきりした言葉ではあらう。しかし、それすら、一步深く考へようとすれば、底なしの沼に踏み込むやうな不安、はっきり言

へば恐怖のやうなものを私は感ずる。それはこの歌語を支へる源氏物語の全語彙体系の性格がはっきりしてゐない所に由来する。(271頁)

と指摘されているが、十数年以前の大著の方法は、現代の源氏学の方向を導く画期的な役割を果すものでもあった。小町谷照彦氏の「源氏物語の歌ことば表現」(東京大学出版会)は、その新たなる発展、創造の営みとして高い意味をもっている。

「源氏物語の本文と享受」(拙著・和泉書院)に対する、関根賢司氏の

本書の第一篇「夕顔の巻疏注」の、はじめに論題を明示するのではなく、いきなり諸氏の所説を詳細に引用し、語義を解釈するためには用例を博搜して検討する、というオーソドックスで手堅い方法が、実は、誰しもが行っている源氏物語の読みかた、つまり読みながら考え、諸説や他の例を調べながら考えていく〈読む〉いとなみの現場の、再現というに近い報告であるのにはかなならなかった。

という「国学院雑誌」(昭62・3)の「書評」は、それは、それとして、一つの意味をもつものかも知れないが、「誰しもが行っている」読みかたであるとともに、また、誰しもが行い得ない一つの個性に貫かれた読み方であることを知らなければならぬ。この物語を真摯に読み、謙虚に研究的業績を評価していく立場からは、こういう読み方はしないように思う。「こまやかに」丁寧に読んでいくことは、標題や項目、解題だけを乱暴に読みとばしていく読み方より、やはり、内容や意味を持っていると思う。石田氏の述懐は、そういう意味で示唆するところが大きいし、一つの語誌をたどりながら、語意を探り、物語を理解、鑑賞していく過程のなかにこそ、源氏物語の大切な一つの読みの方法があるのだ、ということを知る必要がある。藤井貞和氏(「新収源氏物語図書館20選」国文学 昭56年5月 至文堂)は、「源氏物語とその周辺」(伊那毎日新聞社)に対して、「立ち走る」という語の変遷をたどるところがすぐれている(131頁)

と批評された。見識の高さ、確かさを傾聴すべきだと思ふ。源氏物語の作者の用語意識には、例えば柿本人麿の「夕波千鳥」、与謝野晶子の「桜月夜」のごとく、誇らしい、きらっと輝くような造語をつくり出していくことは少なかつたように思ふ。既成の語彙や歌語の語誌に鋭く迫り、それに寄りかゝりながら、物語を創造し、形象化していく歌人的素質を豊かにもった作家であつたように思ふ。それだけに、一つの歌語・語彙、あるいは歌ことば表現のなかに、作者の用語意識をよみとろうとする営みは、半面、きわめて個性的、主体的に、この物語を読んでいくことにもなる。そして、そうした営みを通して、源氏物語の世界——その本質と主題——へと迫り、それをよみ解いていくこともできる、という事実と方法とを知る必要がある。

紫式部日記に、

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ、うちとけて文はしり書きたるに、そのかたのざえある人、はかない言葉のにはひも見えはべるめり。歌は、いとをかききこと、ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌よみざまにこそはべらざめれ。口にまかせたることどもに、かならずをかききとふしの、目にとまるよみそへはべり。それだに、人のよみたらむ歌、難じことわりるたらむは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌のよまるるなめりとぞ、見えたるすぢにはべるかし。はづかしげなる歌よみとはおぼえはべらず。

〔紫式部日記 紫式部集〕新潮日本古典集成 89頁)

とある。この部分についての解釈は、さまざまな角度から、多くの人々によって試みられているが、異なる見解も少なくない。だが、「当時は『古今集』以来の知的に趣向をこらした歌が尊ばれていた。ところが、和泉式部の歌は感情を素直に歌う新しい歌風であった。作者は伝統的な歌をよしとする立場から和泉式部の歌を批評している。」(山本利達「新潮日本古典集成」89頁)「和泉式部が即興多作の技巧派歌人であることを見抜いていた」(萩谷朴「紫式部日記全注釈」下

卷 231頁) という論点は、ほぼ共通の見解と考えてよさそうである。後拾遺集には和泉式部の歌が最も多く入集し、六十七首に達する。やはり、一流の歌人であったことは、娘小式部をめぐる「大江山」の歌の「十訓抄」の説話のなかにもうかがうことができる。紫式部日記の評語は、一面から見れば紫式部に分がない、あがきのように見られがちではあるが、やはり、そういう見方は、一面的過ぎるように思われる。和泉式部をモデルにしたかと言われる「木枯の女」の、意地悪い「鳥澁」なる扱いを重ね合わせるという、仮説の上に立たなくとも、それは、歌語やある種の語彙を、したたかに操る紫式部の、自負と誇りとがそれとなく謎のように秘められた評語であったようにも解される。萩谷氏は、「日記」消息体人性論の対象として、赤染衛門、清少納言、和泉式部の三人には、「むしろ嫉視羨望の感情さえよみとられるような態度で、特に和泉式部と清少納言とは、仮借なき非難を加えている」とされ、「後十五番歌合」の人選に洩れ、著しくそのプライドを傷つけられたことが、入選した女流歌人に対する仮借なき非難となってあらわれたと指摘される。

玉鬘の巻末は、末摘花の返歌にからませた光源氏の歌論であるが、こういう視座に立って再検討を加える必要があるように思われる。「もとより後れたる方の、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば」(『全集』(3) 132頁) は、『湖月抄』傍注に「源卑下の詞歌の道に不堪のよし也」とある。新典社『影印校注古典叢書・玉鬘・初音』(小山利彦) は、「不得手な和歌の才のことなどで、なおさら堅苦しいと源氏は謙遜している」(126頁) とそれをうける。ところが、『全集』は、「謙遜というよりは、道化であろう」(132頁) とし、この前後の文意を、「以下、源氏の口をかりて作者の自由な詠歌の心構えが述べられる。形式主義の固陋な作法書やその遵奉者を批判する言葉」(132頁)「ここでの性格づけは、蓬生巻の哀れぶかさ、けなげさは影を消して、末摘花巻と同様の愚かしさが著しい。波乱に富んだこの巻は、こうして喜劇的な幕切れとなる。」(133頁) とその鳥澁ぶりを注記する。『大系』は語釈に徹する。『評釈』(玉上) は、

父宮の書きのこされた歌学書の類を読んで、ひたすらその内容を守ることに終止している。自分の感情を主張しよ

(第五卷 148頁)

うとするつもりはない。ただ、与えられた条件をそのまま受け入れる、というのがこの方の処世の態度なのである。

とし、「保守的な歌よみをも非難している」と指摘する。この前後の部分には、『玉の小櫛』に、「此所、さだかに聞えぬ語也、うつしあやまりなどあるにや、」〔此詞、いかにいへるにか、〕〔本居宣長全集〕第四卷・筑摩書房・433頁）などの注記があるように、確かに文意のとりにくい語句が存在する。一語一語に亘る語釈は省略せざるを得ないが、『全集』のように、徹底的な戯画化、烏滸物語化と考えていくかどうかは、既に引用した『全集』〔3〕 132頁〕の本文の解釈に深く関わる問題である。

だが、拾遺和歌集から後拾遺和歌集に至る、ほぼ八十年間に亘る勅撰和歌集空白期のもつ史的意思是、また、きわめて大きいものがあつた。『後拾遺』は、平田喜信氏（『後拾遺和歌集』〔国文学〕62年4月号 学燈社）が指摘されるように、女流文学の最盛期を掬い取り、三代集における女歌とは異なる「ひとへにをかしき風体」という、新しい女歌の世界を拓いたものである。そして、中世和歌へと向う屈折点をなすに至っている。それは、和歌史の転換期に位置するこの集の立場を鮮明にしている。玉鬘巻末の歌論は、こういう風潮のなかでつくりあげられているが、和歌の「髓脳」というような、形式的、保守的な歌学の世界の規制を否定し、それを離れて自由な詠歌の心構えを主張したものだといえ、くのは、やはり一面的で、片寄り過ぎた理解に過ぎないといえ、言い過ぎになるだろうか。源氏物語の作者は、こういう発想には不慣れであつたように思う。だから、

歌に対する知識がいくら豊富でも、歌物語や歌枕のたぐいにいくら精通していても、それによってその人の歌の傾向がそんなに変わるものではない。むしろ髓脳の言う歌の病いなどを避けようとするあまり、いよいよ歌らしさから離れてゆく、というのが源氏の批評の要点である。（第五卷 148頁）

というような「花鳥余情」の説をうける「評釈」の見解にも従い難い。やはり、それにとらわれ、墨守することへの反語であり、風刺であった。意見や個性を胸奥に秘め、かどかどしからず、おっとり取りつくりう女性の生き方に、男の理想を夢みる見方は、そういう立場に最も自然につながっていく。歌学書の類にとらわれ、それを墨守するのではなく、そこに新しい酒を盛りこんでいく、主体的な詠歌の営みの必要性を説いているのではないか。紫の上が「見ぬ人、はた、心ことにこそは遠かりけれ」と巻末で語るのに対して、「姫君の御字間に、いと用なからん」と光源氏が答えているのは、全くそれが不用であると解すべきではないのか。かたくなに一つの立場にとらわれ、かえってそれに安住し、主体的で個性的な詠歌の営みを失っていく、そういう類の人間になっていってしまうことへの警鐘としての否定的意味があったのではないだろうか。「言の葉つづき、たよりある心地すべかめり」、「詠みつきたる筋こそ、強うは変らざるべけれ」という光源氏の詞は、やはり逆説なのであった。「よく案内知りたまへる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」は、そういう逆説的世界から領導されていったものと考えることによって、一つの意味をもつものとしてやり生きてくる。このように、「ひとへにをかしき風体」という、新しい女歌の世界は、「髓腦」的世界に真向から対立し、対決するなからつくり出されてきたものではなかった。

和泉式部は、家集の中だけでも千五百余首を残す多作の歌人であるが、平田氏によれば、「後拾遺」の入集歌六十七首中、二十首は「百首歌」からの選人であり、それは、「現存家集の中でも比較的生活詠の匂いの稀薄な、一種題詠的な秀歌が集中している部分」(102頁)であるといわれる。和泉式部の作風といわれているものからは少しはずれる部分もないではないが、多作の歌群の中には、また、高い次元の美意識によって形象された歌の世界も存在する。だが、平田氏が指摘されるように、「その選歌の方法は、資料により、歌人によりかなり恣意的であった可能性も同時に否定することはできない」(103頁)という点も見られる。玉鬘巻末の歌論を、このように読んでみると、和泉式部に対する

紫式部日記の記述には、一流の歌人に対する分のないあがきとか、歌合の人選に洩れた恨み辛みとかいう面だけではなく、詠歌の方法、態度に対する異質の対立する認識も介在していたからではなかったか、と思われてくる。女性論と物語論という論議に、そのかげを失ってしまっているが、やはり紫式部は、明確な歌論をもった歌人として、歌物語的世界に、物語の視座を据え、源氏物語を語っていかうともしている。帚木の巻には、歌語りの発想をもとに、つくり出されていった短編的な歌物語的世界の集成、再構成が、既になされている。

Ⅲ

「Ⅰ」にかかげた資料をもとに、「(御)面影」の語が、源氏物語の世界とどのような関わりをもっているのか、その語誌を背後に考慮しながら、具体的に検討を加えていくことにする。

若紫の巻で、光源氏は紫の姫君を「面影」(資料(4))として捉え、「資料」(5)、(6)、(7)、(9)、(11)と、若紫の巻から明石の巻に至る四帖六例の、この語の用例の中に、一貫して紫上との深い愛の絆の世界を語る。「資料」(8)は、紫上が遠く別れていった源氏への愛の絆を、この語によって確かめている。ただ、その立場を逆転させているに過ぎない。その間、「資料」(10)は、源氏が桐壺院の面影を夢見ることによって、須磨、明石の流離、謫居の運命がひらけ、救われて、六条院の栄華への道を登りつめていく。「御面影」の「資料」(2)は、その伏線・序曲である。「資料」(12)では、紫上と藤壺とが重ねられ、(18)で、源氏は亡き紫上を恋して、悲しく面影にしのび、慰めかねている。その間、「資料」(13)では夕霧の雲井雁への想いを、(14)で源氏の玉鬘への懸想を「面影」として捉えている。それは、(3)にまで遡源していくことができる。

野分の朝、夕霧が紫上を垣間見て、心をまどわす「御面影」、「資料」(3)は、柏木と女三宮との密通を対偶的に語る源氏物語第二部の世界への伏線・序曲ともなっている。「資料」(4)は、臨終に近い柏木の女三宮に対する想いを「面影」として捉える。野分の巻の場面は、若菜上巻「資料」(5)で再びくり返し、対偶的に再現される。(7)では、夕霧の柏木に対する挽歌の心情を「面影」の語で表現していく。この三帖、四例の「(御)面影」の語を、したたかに操りながら、緊密な対偶意識によって物語の第一部から第二部へと、その世界の展開を企ていく物語作者の方法は、実に見事だといわなければならない。それは、最初の構想がどうであったとか、成立上の問題がどうであったとか、そういう推測の上の論議を越えて、物語の骨格を領導していく語として、「(御)面影」の語は、きわめて重要な意味と役割を果していると考えなければならない。

「資料」2で明かなように、「(御)面影」の語は、源氏によって十四例、全用例の四二・四％と高い百分率で用いられている。しかも、誰を「(御)面影」の語で捉えているかという、その対象を調べると、紫上が十例、三〇・三％という、やはりかなり高い百分率で用いられている。この二人に異常に高い傾斜配分が見られ、しかも、「資料」(2)を考慮すると、この数値はさらに高くなる。

源氏物語第三部、橋姫の巻は、歌語を散りばめて抒情性、情趣豊かな余情的、韻律的な道行文的章段を前半にもつ。「資料」(8)は、その後に続く物語。ただ、この部分は、青表紙本、河内本、別本系陽明文庫本を除く別本系六本は、「校異欄」に示したごとく、「面影」の語を欠く。だが、「資料」(9)、東屋の巻の歌は、やはり、この部分と照応して一つの物語的世界を形成している。物語の対偶的な構成の上からも、諸本に見られるように、この語を存するのが妥当のように思われる。この間に挿まれた四例は、薫君をめぐる女人大君、中君の心の揺れと、浮舟の登場、その母の思いを描く。ここでも、「資料」(10)、東屋の巻は、河内本及び別本系の御物本・保坂本は、「面影」の語を欠いている。このように、「面

影」の語の有無は、物語を領導する重要な語彙として、一方では、本文解釈の上で意識的、意図的につくり出されたり、削除されていた物語の享受にかかわる解釈的異文であることを示している。そして、ここでは、浮舟入水の決意と母との関係に、深くかゝる重要な語彙であることを語っている。

「資料」④から⑦の四例、浮舟の巻の用例は、浮舟と匂宮という関係で一貫し、緊密に一群の物語を構成する。だが、これらの用例は、源氏と紫上との愛の絆の世界を語るという、源氏物語第一部の用語意識とは、かなり違ったものが見られる。浮舟にとって、匂宮の「面影」は、「うたて心憂の身」、「うたてあるまで覚ゆ」、「絶えず悲しくて……いと いみじく泣く」という、自からはかない、つらい宿業を自覚させていく機縁となるものだった。匂宮も浮舟への思いを、「さりとも恋しと思ふらむかしと思しやるにも、物思ひて居たらむさまのみ、面影に見え」という、愛の形で認識しなければならなかった。浮舟と匂宮の間に存在する決定的な愛の不毛と背反の世界を暗示しながら、物語の作者は、大君への形代の愛の意味を、生ける浮舟に対する愛として検証し、語ろうとしているように思われる。「山路の露」も、こういう意味で、物語享受の営みから作り出されていたものと考えなければならない。「(御)面影」の語を、物語を領導する重要な語彙として捉えてくると、物語の第一部から、第二部、第三部への展開という用語意識のなかに存在しているのは、バラドックスの方法であった。こうした逆説表現の世界の裏側には、複眼的・弁証法的な批判の精神に貫かれ、対偶的な美意識によって物語をつぐみ出そうとする、みずみずしい創作意識が秘められてもいる。

石田稷二氏(『源氏物語論集』桜楓社)は、匂宮、紅梅、竹河の三帖をめぐる、「この三帖は、殆ど筆の方向が逆だ、と言っている。上手下手といふよりも、才能の質が違ふのである」(482頁)と、碁石の方向が逆だという比喻を借りて述べられる。そして、竹河の巻「七月よりはらみ給ひにけり」を引かれ、「語の複合による造語能力は、三帖を通じて、特にまた紅梅、竹河の両帖において、貧弱であるやうである。」(485頁)と指摘されている。「資料」①9、竹河の巻の用

例には、確かに石田氏の指摘されるような問題があるようにも思われる。薫を中心とする物語の世界からはみ出している人物という点では、確かに異例な用例ではあるが、柏木の影を強く揺曳する表現のなかに、逆の意味を読みとる立場もあり、そういう立場からすれば、竹河の巻の用例は、それを補足するための一資料としての役割を果すことにもなる。だが、この物語は、竹河の巻冒頭の前口上からすれば、源氏一族からは疎遠な、故鬚黒大臣邸の老女房たちの間わず語り、という形で語られる。「紫のゆかり」の物語とは違ふという視座の設定がなされている。三谷邦明氏（「玉鬚のその後」）（有斐閣「講座『源氏物語の世界』第七集」）は、更に、「紫のゆかり」とも「悪御達」とも一定の距離を保った筆録者らしい「語り手」が登場（289頁）するとされ、高橋亨氏（「物語の語り手」②）（同310頁）は、「本伝」と「別伝」という立場に立たれる。夕霧の子息、蔵人少将は、玉鬚の二人の姫君が碁を打つ場面を垣間見、大君に懸想する。そして「面影」に慕う。だが大君は冷泉院に参院、中君も帝に入内する。鬚黒大臣邸でもてはやされた薫も、参院した大君に思慕の念を抱く。玉鬚の若やいだおっとりとした振舞いに、薫は、

御息所もかやうにぞおはすべかめるを、宇治の姫君の心とまりておぼゆるも、かうざまなるけはひのをかしきぞかし、と思ひ居給へり。（「新釈」 卷四 430頁）

という。宇治の大君への思いは、玉鬚の大君に対する見果てぬ恋の思いへの形代だというのである。紅梅の巻末にも、匂宮を、

通ひ給ふ忍び所多く、八の宮の姫君にも、御志浅からで、いと繁うまかでありき給ふ、頼もしげなき御心のあだあだしさなども、（「新釈」 卷四 381頁）

と、捉えている。橋姫の巻以下宇治十帖の物語への伏線、予告と考えるべきであろうが、匂宮の紅梅の御方への懸想が、八宮の姫君への恋と重ねられていく。紅梅、竹河の巻の、こうした構成的な方法は、既に玉鬚系物語の、紫上系物語に

対する構成法としても一般的には見られるものであった。そういう視点からすれば、それは単なる伏線、予告という意味だけではなく、物語の対偶的な構成という問題に深くかゝわる部分もあった。句、紅梅、竹河の三帖をめぐる作者、成立、構成についての論議は、問題が多岐に亘り、複雑である。だが、それについては、「竹河の巻」と物語の主題」(『源氏物語とその周辺』 145頁)で論述したように、「これらの巻々が、平安時代の物語の形態を伝える源氏物語絵巻や、伊行釈に存在する事実は、やはり恣意的に考えるべきものではあるまい。これらの体系、形態を、源氏物語として享受して来たという、厳然たる事実が大切」(148頁)であるとす、いわば、巨視的な物語享受の立場とともに、また、石田氏が指摘されるような微視的な享受の立場をもつき合わせて考える必要がある。しかしながら紅梅や竹河の巻の、こうした宇治十帖の物語を組み込んでくる「時間が錯綜」(三谷邦明氏)した対偶的な物語の構成法というようなものには、根源的、本質的なもの、内面的必然性というような、主題に関わる視座を欠落させた安易さがある。そして、このように源氏物語を読んでいくと、石田氏の論に加担しようという意識に動かされてもいく。だが、「御面影」の「資料」(1)、源氏が末摘花を「御面影」にかけるという、末摘花の巻の用例との関係を探ろうとする衝動に、より強くかたてられてもいく。

末摘花を「御面影」として思ひ出し、「ふりにける頭の雪を見る人も」の歌を中心に語られるこの章段は、

さだかに見給ひては、なかくあはれにいみじくて、まめやかなるさまに、常に音づれ給ふ。(『新釈』巻一 261頁)

というあたりに焦点を置くと、「植込みや火種など小道具の用い方も巧妙であり、源氏の深いとおしみの感情が、「秦中吟」をふまえる上品なユーモアと交錯してみごとに語られる。」(『全集』 (1) 370頁)というように、読んでいくこととなる。だが、末摘花との逢う瀬を「父親王の、うしろめたしとたぐへおき給ひけむ魂のしるべ」(260頁)と、昔物語風にしたて直すことによって自らを納得させながらも、「頭中将にこれを見せたらむ時、いかなる事をよそへいはむ、

常にうかがひくれば、今見つけられなむ、とすべなうおぼす」(261頁)というあたりに焦点を置いて読んでいくと、

源氏は姫を笑う。頭の中将を思う。口悪い若君達は、どれほどの比喻を用いて、姫を笑うか、と思う。自分をも笑おう、と思う。読者も同じ思いである。(『評釈』(玉上)第二巻 277頁)

というような読み方になる。源氏物語は、こういう両極と、その間に微妙に揺らぐ心情を、その折々に応じて描いている。性格描写、人間像の表出という面で、一つの一貫性を要求する近代文学の方法に慣れてしまっているものにとつては、読みにくさと不思議さをもった作品である。末摘花の巻のこの章段に、何を讀みとるかという問題は、やはり微妙だし、そこに物語享受のたのしさがあつたように思う。この章段には、「資料」に抜書きした部分だけを見ても、誇張された戯画化、アイロニーが存在する。「鼻の色にいでて」「御面影」「ほほ笑まれ給ふ」という語句には、そういう気持が端的に表現されている。だが、河内本や別本系統の陽明文庫本には、「おほしたりつる面かけ」とあり、「御」が削除されることによつて、そういう気持が柔げられ、一つの合理化、解釈的異文がつくり出されていったと考へてよいように思う。そして、こういう読み方をしてくると、やはり、『評釈』に近い物語讀みをしていくことになるが、末摘花は、源氏に「御面影」となつて思い出されてくるような女性ではなかつた。物語の作者は、そこに、アイロニー、逆説の世界を表現していたのである。こういう、したたかな用語意識によつて、重要な語彙を操つていくところに、並々ならぬ作者の物語的方法が見られる。

竹河の巻末は、紅梅右大臣邸の繁栄と北方真木柱の幸福、匂宮・薫を婿にと志す右大臣の思いというような世界とは対照的に、多くの貴公子達の求婚、それを退け、鬚黒の遺志を守つての冷泉院・帝への参院・入内というはなやかな求婚譚とは裏腹に、ひっそりと静まりかえる故鬚黒邸の、ともすれば落魄へと傾斜しがちな玉鬘周辺の有様を描く。ここでも、物語は、対照的、対偶的に構成、語られていく。玉鬘は、「定めなの世や。いづれにか寄るべき」と嘆く。蔵人

少将は、宰相中将に昇進、大君への思いを玉鬘に訴える。そうした中将を「涙おし拭ふも、殊更めいたり」と捉え、玉鬘は、「見苦しの君たちの、世の中を心のままにおこりて、官位をば何とも思はず過ぐしいますからふや。」と、手厳しく批判する。玉鬘にとって、宰相中将などは、単に一人の端役に過ぎない、という書き様である。「薫のライバルとして登場する夕霧の子息、蔵人少将を造型する」(池田和臣「匂宮・紅梅・竹河三帖の成立」有斐閣講座「源氏物語の世界」第七集 305頁)という読み方には従い難いように思う。確かに、そういう場面をとり込んでくるような対偶的な局面描写がないわけではないが、竹河の巻の主筋のなかに、そうした対偶意識を読みとっていくのは、やはり、錯誤のようにも思われる。更にまた、蔵人少将の大君への恋の叙述には、若菜下巻の柏木と女三宮の密通事件を意識に置いた語句の引用、「むかいあっている」照応した表現と状況とが目につく、という。その詳細な分析、論証によって、「あからさまにそれとは明示せぬ隠し彫りの体で、柏木の密通すなはち薫の宿世が玉鬘大君の求婚譚の中に象嵌されている」(「竹河巻と橋姫物語試論」『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』古代文学論叢第七輯 武蔵野書院 125頁)と指摘される。池田氏の指摘されるように、源氏取りというような表現の二重性が見られることは事実である。だが、柏木の孕んでいたものを照らし返す表現、それを含み持つ竹河巻が根本から総角巻の展開上に作用することで、薫の大君への愛執は支えられるのである。匂宮に中君をという奸計をもってしてまで、即ち実は自分が冷泉院の弟でないということが発覚し寵遇と社会的基盤を失う危険を犯してまで、薫を愛執におもむかせる根源、それは薫の性格の中にあるのではなく、竹河巻の表現の二重性の中にあつたのである。(130頁)

と、竹河の巻を、橋姫物語の世界の支盤をなすものと考えられる時、果してそうなのかと、やはり疑問に思われることが多い。冷泉帝の皇統を一代限りとする意識が何如なるものであつたのか、そこには「史記」によって培われた史眼ともいふべきもの、女房文学の世界をはるかに越えた意識がはたらいいたようにも考えられるが、大君との間に生まれた女

二宮、今宮は、存在の空間を竹河巻に限られていることに注意する必要がある。冷泉院も玉鬘も不自然なくらいに若返っている。挿入的、挿話的意識に強くささえられた竹河の巻の物語に、発展的な契機を読みとるべきであろうか。網の目のように張りめぐらされた「源氏取り」という表現の「二重性」も、根源的、本質的なもの、内面的必然性というような主題に深く関わる視座をもつものではなく、挿入的、挿話的意識に強烈に支えられ、発展的契機をもつものではなかったように思う。そういう点では、末摘花の巻に酷似した構成をもつ物語だということができる。こういう判断に傾いていくことは、この巻の作者や成立についての徹視的な考えを仮説として前提にもつてのことではあるが、場面をとり込んでくる、対偶的な局面描写を深読みしていくことは、巻によっては、あるいは危険なことのようにも思う。三谷邦明氏は先に引用した「玉鬘のその後」の中で、

〈非知〉を担っているのは、登場人物であり、ひいては「悪御達」という〈語り手〉であって、〈話者〉や〈読者〉ではない。若菜巻での女三の宮事件を読み、匂宮巻でわが身の出生に関する疑念に苦しむ薫の姿を知っている〈読者〉は、竹河巻々頭の「ひがこと」をそうした〈期待の地平〉で理解することく、〈非知〉の世界を嘲笑さえ伴いながら俯瞰するのであって、透徹した眼差し。アイロニーでこの巻を読むことが要請されているのである。(275頁)

と指摘されている。こういう立場から竹河の巻を読んでいくと、「この巻は、形式は派手な求婚譚ながら、実質は逆に、亡夫の遺志に添おうとする努力が裏目に出て苦勞する未亡人の物語である。」(『全集』(5) 106頁)とか、「過去から続いてきた人間関係が、今の玉鬘の意志を縛り、その上に次々と連鎖的に押し寄せてくる人の思わくの苦しさ、殆んど追いつめられながらも、この重圧に意外にしっかりと耐えているのは、玉鬘の生来の明るい性格と、苦勞した幼少時の経験がものを言っている」(常磐井和子「匂宮・紅梅・竹河」『源氏物語講座』第四卷 有精堂 102頁)というような読み方には、ならないように思う。三谷氏が、〈読者〉、〈知〉、〈登場人物〉、〈非知〉という構造で捉えようとした竹河

の巻主筋の物語は、鬚黒の遺志を守り、次代への展望を欠いた玉鬘の錯誤と、抑止と演技のなかに凋んでいく薫の愛の形と世界を、アイロニーのなかに、バラドックスに語ることであった。宰相の中将（蔵人少将）は、大君の懸想人として、竹河の巻にはなやかに登場する。だがその後は、総角の巻で、匂宮、薫が、宇治へ紅葉狩に行くのに従うという、端役に過ぎない。こういう男達こそ、大君の婿としてふさわしいことを玉鬘には理解し得なかったという錯誤への戯画化、風刺と皮肉とが、反語的に語られているようにも思われる。それは一面的には、確かに薫と対偶的に配置されている人物だという側面もある。けれども、けっして「ライバル」という存在ではなかった。巻を隔てて紅梅邸の匂宮、薫のもてなし方とは対偶的に扱われている。対照的、対偶的配置の意味をこのように考えてくると、「資料」19、竹河の巻には、やはり逆説的な用語意識がはたらいていたと見なければならぬ。

「(御)面影」という語の語誌を探りながら、物語作者の用語意識を辿ることによって、物語享受の一つの方法を確立しようとした試論であるけれども、「断章」の域にとどまりはしないかと、ひそかにおそれもある。だが「夢語り」の語にも、物語を領導していく用語意識が見られるように思われ、こうした視座からのアプローチも、また、きわめて有効な物語読みの一つの方法であると考ええる。

二、『首書源氏物語』玉鬘の巻の本文と物語の享受

I

石原美奈子・野村精一氏（『首書源氏の初摺本と「或抄」について——孟津抄校訂遺事（四）（『研究と資料』（62年7月30日刊・第十七輯）71頁）によれば、寛文十三年刊の奥書をもつ『首書源氏物語』には二種類あって、和泉書院「影印叢刊別巻」の底本となった大阪女子大蔵本（現流布本）などに先行したとおぼしい、初摺本が存在したとされる。それは、実践女子大図書館蔵山岸文庫本などに見られるような、桐壺の巻から薄雲の巻に至る十九帖に、『孟津抄』の引用注を欠く『首書源氏』の諸本である。野村氏の調査によって、現流布本に『孟津抄』の引用注がある桐壺の巻の十八例、夕顔の巻二十七例、若紫の巻二十一例に対する山岸文庫本との関係を図示すると、次のようになる。（）内は、巻中の総数に対する百分率。

事項	卷名	桐壺	夕顔	若紫
(イ) 山岸文庫本「ナシ」		12 (六六・七)	8 (二九・六)	14 (六六・七)
(ロ) 山岸文庫本「或抄」とする		3 (二六・七)	17 (六三・〇)	1 (四・八)
(ハ) 山岸文庫本「或抄」に関係		1 (五・六)		

(一) 山岸文庫本「万水」とする	2 (一一・一)	2 (七・四)	6 (二八・六)
(二) 山岸文庫本「巴抄」とする	1 (三・七)		

あえて、えせ「合理主義の統計家」の評を甘受したいとも思うが、断片的なこの資料は、「或抄」が、如何なるものであったか、「何がしかのイメージを導く鍵の一つぐらいにはなる」ばかりでなく、もっと重要な問題をも示唆しているように思う。野村氏が指摘される資料に関する限りでは、「或抄」等↓「孟」(72頁)と見なければならぬが、それはやはり、「孟津抄」による注記の再編成、補訂であったと考えるべきであろう。印行途中でのこうした変更がなぜ必要であったか、野村氏は、

たとえばほとんど並行して刷られていたらしい「湖月抄」とのかかわりの中で、「孟津抄」が俄かに採上げられるに至った、とでも見たらいかであろう。(74頁)

と、憶測されている。そして、「注」で、「或抄」は引用の形態から、「単一の書でないことを示しているかもしれない」とされ、「一竿斎じしんの考えを記した書物ないしノート」(74頁)として、「或抄」の注文の取り扱いが恣意的になされることもあったと指摘されている。これらの問題については、「湖月抄」と「首書」本の本文の性格と物語の享受を論述する項で再検討を加えたいが、氏が、既にいわれるように、「この桐壺——薄雲の部分のみが、何らかの上木過程のミスによって、たま／＼充分な補刻が行われていない板が、印行された、とみる方が穩かかもしれない。」(75頁)という視座と、「種以降は、大略通行流布の寛文並びに宝永版本などと相等しい」(71頁)という事実からすれば、現流布本「首書源氏物語」を、一竿斎によって、一応は完成された注釈研究の成果であると考えて、何ら支障がないように思われる。本稿もまた、和泉書院の「首書源氏」玉鬘の巻の校訂遺事として執筆したものである。

「首書源氏」の本文が、三条西家の源氏学に深く関わるものであることは、既に指摘されているごとくである。実隆、公条、実枝、幽斎、通村と江戸時代に及んだ三条西家の源氏学は、やはり、流布本の主流として重きをなしてきた。「孟津抄」（九禪抄）の著者九条植通は、実隆の娘を母とし、公条は叔父に当る。戦乱のなかでの、公卿の俸禄もままならず、二十八歳で関白内大臣を辞し、二十余年間に亘る京都を離れての、流浪生活を余儀なくされた。伊井春樹氏（『源氏物語注釈史の研究』桜楓社）は、「源氏物語竟宴記」を引かれ、

我が身の数奇な変転とした運命を、彼は周公旦や伊周と重ねあわせて見ているのである。それは、周公旦や伊周をモデルにしたと古注などで指摘される光源氏の運命ともつながってくる。（1069頁）

と、指摘されている。公条（称名院）、実枝（三光院）に不審をただし、正統的な三条西家の源氏学の継承者としての立場を鮮明に確立しようとした「源氏物語竟宴」、「孟津抄」の述作という、大業をなし遂げた室町末期の源氏学の碩学ではあるが、「孟津抄」は、「弄花抄」の三条西家源氏学の正統的注釈書の位置からすれば、ややアウトサイダー的立場に立つものと見られていた面があるように思われる。

幽斎を経て、中院通勝によって十年の苦節の末に成立した「岷江入楚」は、三条西家の源氏学の集大成を意図して結集された諸注集成であり、注釈史上、きわめて大きな意味をもつものである。伊井博士は、通勝が「岷江入楚」の料簡の引用書目の項に「孟津抄」（九禪抄）を名をあげていないが、所持していたのだろう、注釈にはしばしば用いている。（457頁）と指摘されている。この事実は、三条西家や九条家という、政治的、学問的に優位な立場にある植通の業績に隠されて、見落しがちなことではあるが、「弄花抄」に対する「孟津抄」の学統的位置をきわめて明確に示しているもののように思われる。そして、「首書源氏」の「孟津抄」に対する初摺本の扱いも、こういう立場から引き継がれてきた学統上の問題も、やはり、一つの要因として存在していたように思う。

ところが、三条西家の青表紙本の本文は、鎌倉時代の定家の青表紙とは異なる所があるし、「源氏物語大成」の底本や青表紙本系諸本として集録された諸本とも異なる所がある。「湖月抄」の本文を青表紙本とするような、おおらかで寛容な系統論からすれば、「藤原定家という一代の学匠詩人の書写した本文あるいはその系統の本文によって、つまりは定家というフィルタールをおして読まれているのであった。」というような発言になるのだと思う。確かに、定家の青表紙本再建への試みはなされてはいるが、きわめて困難な現状にあり、その校訂の実態についてさえ、問題がある。「青表紙本による研究が一段落した現在」というような、安易な発言によって、にわかに論断すべき問題ではないように思う。

『首書源氏』の本文が、『湖月抄』と深い関係にあることは、吉岡曠氏（『首書源氏物語 末摘花』和泉書院）が指摘されている。そのことは、この玉鬘の巻についてもいうことができる。『首書』本が、『大成』底本の大島本と異なる異文で、管見にはいったものは百四十四例であった。大島本の独自異文が四例あるが、諸本間に異なるものあるものと判定されるものに限って、百四十四例の中に加えた。うち『首書』本の独自異文数は十例で、他の諸本と共通異文を形成するものは百三十四例である。『湖月抄』と単独で共通異文を形成するもの二十三例、他の諸本を伴って共通異文を形成するもの八十九例、計百十二例で、『湖月抄』と関係のない異文数は二十二例に過ぎない。それらを分類して示し、検討を加えることにする。略号は「大成」によったが、それに所収されていない宮内庁書陵部蔵青表紙証本、穂久邇文庫蔵本、湖月抄は、「証」・「穂」・「湖」の略号で示した。東山御文庫蔵本「各筆源氏」は「大成」御物本の影印複製であるが、それによる若干の校異（『大成』の誤校などによる）は「東」として区別した。異文は青表紙本・河内本・別本の順序で示し、「湖」は青表紙本としては扱わずに、最後にかかげた。円内の算用数字は、『首書』本（和泉書院 影印叢刊別巻）の頁数である。以下、同じである。

A群 「首書」本の独自異文

⑫いのちさへ——大島本等諸本「いのちたへ」・保「いのちをたへ」・国「いのちのたへ」・⑬いひかゝる——大島本等諸本「いひかゝるを」・穂「いひたるを」・証「いひけるを」・国「いひけるに」・⑭われらは——大島本等諸本「われら」・陽「われは」・河「我身」・証「わか身は」・⑮ふとみ——大島本等諸本「ふとり」・穂「ナシ」・⑯おはするや——大島本等諸本「おはすや」・⑰おはします——大島本等諸本「おはしますを」・⑱ふかかめるを——大島本等諸本「ふかかめるに」・⑲ことに——大島本等諸本「こと」・⑳うゐくしき——大島本等諸本「うゐうゐしき」・保「うゐくさ」・㉑御さうぞく——大島本等諸本「御せうそこ」・横、池、三「御せうそく」・穂・陽「御文はみな」・

「首書」本の独自異文十例は次のように分類することができる。

- (1) 誤読による誤写と考えられるもの……⑫、⑬・
- (2) 誤読あるいは意識的な語の改訂か、判定が困難であるが、後者の傾向がやや強いと考えられるもの……⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、⑳、㉒、㉓、㉔・
- (3) 意識的な語の改訂が、本文の混成、混態の結果生じたかと考えられるもの……㉕・（陽明文庫本との混態か。）
- ⑳、㉑は、(1)に分類することができるとも考えられる。片々たる語の異同にとどまるが、校訂意識を伴った本文の改訂がなされている事実を知ることができる。

B群 第一類 「湖月抄」の本文と単独で共通異文を形成する異文

⑥ことなどを——湖。大島本等諸本「ことなを」・⑦いくか——湖。青・河諸本「ゆくか」など。陽「いかん」・国「いくかなとち」・⑩いふ——湖。大島本等諸本「いふなるを」・御、大・陽、麥、阿「いふも」・㉖ふる

まひ見る——湖。大島本等諸本「ふるまひなとみる」・陽「ふるまひをみる」・②うつつふし——湖。大島本等諸本「うつふしく」・肖「うつふしく」の「く」を見せ消す「ふし」補入・御「うつふし」・③みちひきたてまつり——湖。大島本等諸本「みちひきしらせたてまつり」・④外に——湖。大島本等諸本「ほかに」・④きて——湖。大島本等諸本「ナシ」・⑤したためいでて——湖。大島本等諸本「したためはてて」・大「したためはて」と・陽「したため給へと」・保「したてて」。

⑥おもひ侍るを——湖。大島本等諸本「思侍に」・横「思へはへるに」・⑥ち、おとど——湖。大島本等諸本「ち、おとどに」・⑥給ひし日——湖。大島本等諸本「給えりし」・横「たまひし」・三・陽「たまひしに」・証、穂・東「給へりし」・⑥五条に——湖。大島本等諸本「五条にそ」・⑥とどめ——湖。大島本等諸本「とどめたてまつり」・⑦まだ——湖。大島本等諸本「又」・⑦とかおほゆ——湖。大島本等諸本「とおほゆ」・⑦さうさうしき——湖。大島本等諸本「かうさうくしき」・肖、証、穂「かくさうくしき」・麥、阿「かはかりさうくしき」・⑧こそ——湖。大島本等諸本「こそは」・⑧などは——湖。大島本等諸本「なとは」・御「をは」・穂・七、宮、大、平、鳳、尾・保「とは」・⑧聞えたてまつり——湖。大島本等諸本「きこえつけたてまつり」・証、穂・河・保「聞えつけ」・⑧ありしが——湖。大島本等諸本「ありしかは」・陽「ありしかと」・⑧御返事は——湖。大島本等諸本「返しは」・横、肖、三、証・七、宮、平、鳳、尾、大「かへり事は」・陽、保「かえり事」・御「かへる事」・池、穂「返事は」。

これら二十二例の異文は、「湖月抄」との校合を行わなかったとすれば、「首書」本の独自異文として処理されてしまふものである。だが、両本が単独で、二十二例に及ぶ共通異文をもつ意味は、もっと慎重に考えなければならぬことのように思う。④四行目、「外にかくし」は、「大成」底本には「ほかにかくし」とあり、証、穂・東は「ほか」と

表記するが、「湖」は「と」で、「首書」本と「湖月抄」本文は、単独で共通異文を形成しているものと考えるべきである。

B群 第二類 他の諸本を伴って「湖月抄」の本文と共通異文を形成する異文

④やむごとなき——横、池、肖、三、証、穂・河・陽・湖。大島本等諸本「や事なき」・⑪さるべき人く——陽・湖。大島本等諸本「さるべき人」・⑬せうそこ——肖、証・七、東・湖。大島本等諸本「せうそく」・⑮住付にけり——肖、証、穂・河・陽・湖。大島本等諸本「すみつきにたり」・国「住つきにける」・⑯心のまじり——三・湖。大島本等諸本「心ましり」・⑰しられでは——池、肖、三、証、穂・河・麥、阿・湖・大島本「しらては」・陽「しられすは」・国「しられは」・⑱おはしましけめ——横、池、肖、麥、阿・湖。穂・保、国「おはしましたるを」・証・河・陽「おはしましたるを」・大島本「おはしけめ」・⑲ことども、——横、池、肖、三、麥、阿・湖。大島本等諸本「事とも」・証・河「わさくも」・陽「ことごと」・保「ことも」・⑳とし三十一証、穂・国・湖。河・陽、保「とし四十」・大島本等諸本「三十」・㉑女なども——三・湖。大島本等諸本「をむなとも」・㉒ひとしなみ——横、池、肖、三、証、穂・河・保、国、麥、阿・湖。陽「ひととなみ」・大「ひとなみ」・㉓おもひわづらひて——横、池、肖、三、麥、阿・湖。証、穂・河・陽、保「わづらひて」・大島本等諸本「思わひて」・㉔むすめたちは——肖、三、陽、国、麥、阿・湖。大島本等諸本「むすめたち」・㉕引たがへ侍らば——横、池、三、証、麥、阿・湖。河・陽「ひきたかへ」・穂「ひきたかひ」・肖、保、国「ひきたかへは」・大島本「ひきたかへいつらは」・㉖つらくおもはれんを——証、穂・河・保、麥、阿・湖。国「つらしとや思はれ」・陽「かつはつらくもおもはれんことなとを」・大島本等諸本「思はれむを」・㉗つかうまつる——横、池、肖、三、証・東・陽・湖。大島本等諸本「つかまつる」・㉘すさび——横、池、肖、三、証、穂・湖。河「すさひうたひ」・大島本等諸本「すさみ」・㉙お

もひつゝける——証・東・湖。肖、三・河・別「おもひつつけらる」・大島本等諸本「おもひつつけらるゝ」・³³そのところと——肖・宮、鳳、尾・湖。池「そこと」・大「そこそこと」・陽「そこはかと」・保「そこところとこそと」・麥、阿「そこよその所と」・大島本等諸本「そこところと」・³³しなし——証、穂・河・麥、阿・湖。大島本等諸本「し」・²⁴いへども——三・陽・湖。大島本等諸本「いへと」・³⁵はふらかし——肖、証・河・別・湖。大島本等諸本「はふらし」・³⁶大とこの——陽、麥、阿・湖。肖、穂「たいとくの」・河「たいとこ」・大島本等諸本「大とく」・³⁷へたまひつれば——池、三、証・湖。横「給いつれば」・穂・河・保「給つれ」・麥、阿「給へれ」・陽「たまへる」・大島本等諸本「給えれは」・³⁷いだし奉る——横、三、証・御、大・陽・湖。大島本等諸本「いたしたてたてまつる」・⁴⁰なども——三・湖。大島本等「なと」・⁴³へたるめに——証、穂・河・湖。大島本等諸本「へたてたるめ」・⁴⁴へにたる——池、三・湖。陽「つきへたる」・保「つきたる」・大島本等諸本「へにける」(傍注「イけ」ニ同ジ)・⁴⁵かほを——横、池、三、証・湖。穂・御、七、宮、平、鳳、尾・別「かほほ」・大島本等諸本「かほ」・⁴⁵この女——肖、三・陽、保・湖。証、穂・河・麥、阿「この女うちみつけて」・大島本等諸本「この女の」・⁴⁶はかなき世をおもふにあへなくもやいはんとてかけんもゆゝしくて——証・河・湖。へ平「あへなく——あやなく」・七「ゆゝしくて——ゆゝしく」・へ池「世を……ゆゝしくて——よにあへなくやいはんといひはてす」・穂「……もやおもはむとかけてもゆゝしくて」・陽、麥、阿「……いはんとゆゝしくて」(陽「あへなくも——あへなく」・阿「ゆゝし——ゆかし」)・保「「……世を——世」「おもふに——おもふ」「いはんとて——いはんと」」・⁴⁸三人ながら——証、穂・河・陽、麥、阿・湖。大島本等諸本「二三人」・⁴⁹ひとへめくもの——証、穂・河・保・湖。大島本等諸本「ひとへめくものに」・

⁵⁰尋ねかはして——陽・湖。大島本等諸本「たつねかはし」・⁵¹まぎれに——証・河・別・湖。へ穂「に」小字補

入。大島本等諸本「まきれ」・^{⑤④}あなむくつけやと——保・湖。^{⑤⑤}さまの——横、池、肖、三、穂・湖。陽「さまは」・大島本等諸本「御さまの」・^{⑤⑥}残りなく——肖、穂・宮・麥、阿・湖。大島本等諸本「のこるなく」・^{⑤⑦}かぞへ——横、池、肖、三、証、穂・東・湖。大島本等諸本「かすへ」・^{⑤⑧}はや——横、池、肖、三、麥、阿・湖。陽「はやとて」・大島本等諸本「はやく」・^{⑥⑩}めしつかはせ——池、三・陽・湖。大島本等諸本「めしつかひ」・^{⑥①}えたとねも——肖・保・湖。麥「えたとね」・証、穂・陽、阿「たつね」・河「たつねきこへて」・大島本等諸本「たつねても」・^{⑥②}すぐし——横、池、肖、三、証、穂・東・湖。陽「すきに」・大島本等諸本「すこし」・^{⑥③}たるを——肖・湖。穂・河・陽、保「たるも」・麥、阿「けるも」・証「たるにも」・大島本等諸本「たるに」・^{⑥④}やもめ人——池、肖・大・麥、阿・湖。陽「まめ人」・大島本等諸本「やまめ人」・^{⑥⑦}みたてまつりつけ——池、三・湖。陽「みつけたてまつり」・大島本等諸本「みたまへつけ」・^{⑥⑦}ける——陽・湖。御、大「たり」・大島本等諸本「けり」・^{⑥⑧}廿七八に——七・湖。大島本等諸本「廿七八には」・^{⑥⑨}すぎばはた——証・河・麥、阿・湖。穂・陽、保「すきは又」・大島本等諸本「すきはた」・^{⑦③}おもひいつる——穂・東・陽、阿・湖。肖「見セ消テ補入」・大島本等諸本「思いつる」・^{⑦④}つみかるませ——三、証、穂・湖。陽「かろめさせ」・大島本等諸本「つみかるませ」・^{⑦⑤}つどへたる——証、穂・河・保、麥、阿・湖。横、池、三「つとえたる」・陽「ナシ」・大島本等諸本「つとへる」・^{⑦⑤}たてまつり——池、肖、三、穂・平・保・湖。陽「たてまつらせ」・大島本等諸本「たてまつれ」・^{⑦⑥}たづねきこえ——三、穂・麥、阿・湖。大島本等諸本「たつねしりきこえ」・^{⑦⑧}おもふ給へ——横、池、三、証、穂・湖。東「思給へ」・麥、阿「思給し」・大島本等諸本「思給え」・^{⑦⑧}たいらかに——横、池、三・湖。大島本等諸本「たいらかにたに」・^{⑦⑨}かうばしき——証、穂・河・陽、保・湖。大島本等諸本「かうはしきを」・^{⑦⑩}たいどもなども——横、池、三、東・湖。肖、証、穂・河・別「たいなとも」・大島本等諸本「たいともなと」・^{⑧①}あひすみも——穂・湖。

平「あひすみに」・大島本等諸本「あひすみにも」・㉔をくらかし——証・河・陽、阿・湖。大島本等諸本「をくらし」・㉕女——池、三・御・保・湖。陽「をとな」・大島本等諸本「をうな」・㉖侍るなり——肖、証、穂・河・別・湖。大島本等諸本「侍なりとて」・㉗ことになんと——横、池、肖、三・湖。証・七、平、鳳、宮、尾、大・陽、麥、阿「事になんとはかり」・御「ことなんとはかり」・穂・保「なとはかり」・大島本等諸本「事になむ」・㉘な人を——証、穂・河・保、麥、阿・湖。大島本等諸本「なに人」・㉙奉り——三・御、大・別・湖。大島本等諸本「奉れ」・㉚うちわらひ——肖、証、穂・七、宮、鳳、尾、大・別・湖。大島本等諸本「わらひ」・㉛御行ゑも——陽・湖。大島本等諸本「御ゆくゑを」・㉜給へりける——横、池、三・湖。大島本等諸本「給ける」・㉝くさはひ——肖、証、麥、阿・湖。穂「くさはい」・東・陽、保「くさの」・大島本等諸本「くさわひ」・㉞おほす——陽・湖。横「さきにきおほす」・大島本等諸本「さきにおほす」・㉟ぶこのすけ——証、穂・河・湖。大島本等諸本「ふんこのすけ」・㊱心ち——肖、麥、阿・湖。証、穂・河・陽、保「心ちの」・大島本等諸本「心ちに」・㊲なごりなく——証・河・保、麥、阿・湖。陽「なるを」・保「なれるを」・大島本「なれば」(補入「なれるは」)・㊳てたり——証、穂・麥、阿・湖。(肖「補入」)・大島本等諸本「てたる」・㊴ものども——肖、証、穂・河・保・湖。大島本等諸本「うち物とも」・㊵いづれ——肖・湖。大島本等諸本「いづれも」・㊶人のさま——河・湖。証、穂「人さま」・大島本等諸本「さま」・㊷さて——横、肖、三、証、穂・河・保、麥、阿・湖。へ池「補入」∨・陽「さは」・大島本「さては」・㊸この——証、穂・河・別・湖。大島本等諸本「かの」・㊹よしと——肖、証・河・保、麥、阿・湖。大島本等諸本「よきと」・㊺げににけついたる——証、穂・東・湖。大島本等諸本「けににけついたる」・㊻たるとも——穂・河・陽、保・湖。麥、阿「たるともを」・大島本等諸本「たる」・㊼御かへり——証、穂・御・湖。大島本等諸本「御

返」・㊟すゑつむはな——肖・陽・湖。証、穂・河・保、麥、阿「すゑつむはなは」・大島本等諸本「すゑつむ」・
 ⑩ぬべく——証、三、穂・御・湖。大島本等諸本「ぬへう」・⑪たまへりしが——証、穂・河・保、麥、阿・湖。大
 島本等諸本「たりしか」・⑫たまはざらんは——肖、三、証、穂・河・保、麥、阿・湖。横、池「たまはざらむ」・
 陽「給はずは」・大島本等諸本「給はざらむも」・⑬ことはりや——池、肖・七、宮、平、鳳、尾、大・陽、保・湖。
 御「ことはり」・大島本等諸本「ことはりなりや」・

「首書」本が、他の諸本を伴って『湖月抄』の本文と共通異文を形成する異文数は、八十九例である。それらのうち、
 次の二十四例が複数で重なるの類型を形成している。以下、算用数字は異文数である。

- (イ)陽・湖・5 (ロ)証、穂・河・保、麥、阿・湖・4 (ハ)横、池、肖、三・麥、阿・湖・3
- (ニ)三・湖・2 (ホ)証、穂・河・湖・2 (ヘ)横、池、肖、三、証、穂・東・湖・2
- (ト)肖・湖・2 (チ)横、池、三・湖・2 (リ)池、三・湖・2

この九つの類型以外の六四例の異文の重なりは、それぞれ一例だけであり、六四の類型に達する。それらを分類して示すと、次のようになる。

- (一)、青表紙本・河内本・別本系統の諸本と共通異文を形成するもの……………33
- (二)、青表紙本・別本系統の諸本と共通異文を形成するもの……………17
- (三)、青表紙本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………17
- (四)、青表紙本・河内本系統の諸本と共通異文を形成するもの……………13
- (五)、別本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………7
- (六)、河内本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………2

「首書」本と「湖月抄」本文との重なりを、系統的諸本との関係という視点から延数で集計し、それを百分率で示すと次のようになる。上段は異文数八十九、下段は異文延数百八十五に対する百分率である。

(A)、青表紙本	80	八九・九%	四三・二%	(B)、別本	57	六五・二%	三〇・八%
(C)、河内本	48	五三・九%	二五・九%				

青表紙本、別本、河内本の順に親近度が高いことを示している。だが、これを、関与する諸本という視点に立って、諸本ごとに還元し、その共通異文数と百分率とを示すと、次のようになる。上段は異文数八十九、下段は異文延数五百八十六に対する百分率である。

(A)類、青表紙本系諸本

(イ)証・47	五二・八%	八・〇%	(ロ)穂・39	四三・八%	六・七%
(ハ)三・肖・37	四一・六%	六・三%	(ニ)池・28	三一・五%	四・八%
(ホ)横・21	二三・六%	三・六%			

(B)類、別本系諸本

(イ)阿・34	三八・二%	五・八%	(ロ)麥・33	三七・一%	五・六%
(ハ)保・陽・28	三一・五%	四・八%	(ニ)国・9	一〇・一%	一・五%

(C)類、河内本系諸本

(イ)御・45	五〇・六%	七・七%	(ロ)七・大・宮・34	三八・二%	五・八%
(ハ)鳳・尾・33	三七・一%	五・六%	(ニ)平・32	三六・〇%	五・五%

青表紙本系では、宮内庁書陵部蔵青表紙証本が共通異文数四十七、親近度五二・八%で諸本中最も親近関係が高い。

そして、最も関係の低い池田本・横山家本等一群の間には一つの線を画することができるよう思われる。玉鬘の巻後半部三分一以下には、これら両本の共通異文は、極端に減少する傾向を示している。別本系では、麥生本・阿里莫本両本が共通に関与して共通異文を形成するものが多く、両本との親近関係が最も高い。ただ、別本の一本が関与する場合、「陽・湖」五例に象徴されるように、陽明文庫本との親近関係も指摘することができる。別本五本のうちで最も親近度の低い国冬本は、九例、一〇・一%と、諸本中最も低い数値を示しているが、ここにも、一線を画することができそうである。

【首書】本と「湖月抄」本文との重なるの異文に対する共通異文という視点では、最も低い親近関係を示すのが河内本系統の諸本である。ところが、河内本が共通異文を形成する場合、七本が、単独、または一部諸本が、複数の形で共通異文を形成することは、きわめてまれであって、河内本のすべてが関与して、共通異文を形成する傾向が顕著である。これは、他の諸本間には見られなかった傾向であり、系統論的に示唆するところがきわめて大きいように思われる。【各筆源氏】によって調査した御物本の四十五例を除くと、河内本系諸本が、比較的高い共通異文率をもちながらきわめて近似の数値を示しているのは、こういう事情によるものである。

【首書】本の本文が、「湖月抄」の本文と関係なく、諸本と共通異文を形成する異文数は二十二例に過ぎない。資料として分類して示すと、次のようになる。

C群 「湖月抄」の本文と関係なく、共通異文を形成する異文

⑮かみほとけ—国、麥、阿。大島本等諸本「仏神」・⑳きにたり—証、穂・河・阿、保。大島本等諸本「きにけり」・㉑しもなるわらは—陽、麥、阿。横「しもわらは」・陽「しもなるものをのわらは」・大島本等諸本「しもなる物わらは」・㉒おほかめる—横、池、肖、三、証、穂・東。湖「おほかめる」・保「おほかなめる」・陽

「あまた」・大島本等諸本「おほかむめる」・④はづかしくも——横、池、肖、三、証、穂・河。大島本等諸本「はづかしくは」・

⑤2 ことごと——証、穂・河・陽、阿。麥「ことごとほ」・大島本等諸本「ことごとも」・⑤3 し水のみてらの——肖、証、穂、河。へ七「し水のてらの」・大島本等諸本「しみつの御寺」・⑤4 かかるついでに——池、肖、証、穂・河。別。大島本等諸本「かかるついて」・⑤5 に入る人は——肖、池「にたる人は」・大島本等諸本「にる人」・⑤6 物めかしたて——御。陽「物めかしなしいて」・大島本等諸本「物めかしなしたて」・⑤9 六条院——証、穂・大島本等諸本「六条の院」・⑥0 志つる——穂・東。大島本等諸本「しつるそ」・⑥1 つらん——証、穂・河・陽、保。横「つらむかも」・大島本等諸本「つらむかし」・⑥2 きゝ給て——肖、証、穂・東。湖「聞給ひて」・大島本等諸本「聞給うて」・⑥3 むかしの——陽。大島本等諸本「かのむかしの」・⑥4 中宮の——横、池、肖、三、証、穂・河・陽、保。大島本等諸本「中宮」・⑥5 さうぞく——肖、三。証、穂・東・保・湖「しやうそく」・横、池「御さうそく」・河「さうそく」・大島本等諸本「御しやうそく」・⑥6 すぐれたる——証、穂・河・陽、保。大島本等諸本「いとすぐれたる」・⑥7 ところ——証。大島本等諸本「所の」・⑥8 給へるぞ——池。証、穂・御、七、宮、平、鳳、尾・別「給へるを」・大島本等諸本「給へる」・⑥9 又——肖、証、穂、三・河・別・湖「ナシ」・大島本等諸本「はた」・⑦0 あた人のと——証、穂・宮、七、平、鳳、大、尾・陽、保。御「あた人の」・大島本等諸本「あた人と」・

これら二十二例の共通異文は、四例が複数で重なるの類型を形成する他は、すべてそれぞれ一例だけであり、十八の類型をつくっている。

(イ)証・2・ (ロ)証、穂・河・陽、保・2・

これを諸本系統別に分類して示すと、次のようになる。

- (一)、青表紙本・河内本・別本系統の諸本と共通異文を形成するもの……………7
- (二)、青表紙本・河内本系統の諸本と共通異文を形成するもの……………5
- (三)、青表紙本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………6
- (四)、別本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………3
- (五)、河内本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………1

これらを、系統的諸本との関係という視点から延数で集計し、それを百分率で示すと、次のようになる。上段は異文数二十二、下段は異文延数四十一に対する百分率である。

(A)、青表紙本	18	八一・八%	四三・九%	(B)、河内本	13	五九・一%	三一・七%
(C)、別本	10	四五・五%	二四・四%				

青表紙本、河内本、別本の順に親近度が高く、「B群第二类」と比較すると、河内本と別本の順序が入れ換っているが、順位の比率は近似している。これを、関与する諸本という視点に立って、諸本ごとに還元し、その共通異文数と百分率を示すと、次のようになる。上段は異文数二十二、下段は異文延数百三十八に対する百分率である。

(A)類、青表紙本系諸本

(イ)証・14	六三・六%	一〇・一%	(ロ)穂・13	五九・一%	九・四%
(ハ)肖・9	四〇・九%	六・二%	(ニ)池・5	二二・七%	三・六%
(ホ)三・4	一八・二%	二・九%	(ヘ)横・3	一三・六%	二・二%

(B)類、河内本系諸本

(イ)御・12	五四・五%	八・七%	(ロ)宮・鳳・尾・七・平・大・9	四〇・九%	六・五%
---------	-------	------	------------------	-------	------

(C)類、別本系諸本

- (イ)陽・8 三六・四% 五・八% (ロ)保・6 二七・三% 四・三% (ハ)阿・5 二二・七% 三・六%
(ニ)麥・3 一三・六% 二・二% (ホ)国・2 九・一% 一・四%

青表紙本系では、「B群 第二類」と同様宮内庁書陵部蔵青表紙証本が、共通異文数十四、親近度六三・六%で諸本中最も親近関係が高い。池田本、横山家本との関係が低い点も同様であるが、三条西家本も数値が同じで、「B群 第二類」のように、一線を画することは困難である。「C群」では、別本系にわかって河内本系が親近度第二位を占めている。御物本が共通異文数十二、親近度五四・五%で、やはり、「B群 第二類」で指摘した点は、ほぼ同じように指摘することができる。第三位の別本系は、前半では、「B群 第二類」と同様「麥、阿」の形で共通異文を形成するが、後半部では「陽、保」の形で共通異文をつくる傾向が顕著で、巻全体としては、陽明文庫本、阿里莫本の親近度が高くなっている。「B群 第二類」と同様、国冬本の親近度が最も低い。

「B群 第二類」と「C群」との関係を、このように検討してみると、「首書」本の本文は、「湖月抄」の本文と同列に扱わなければならない、今泉忠義博士が、『源氏物語 現代語訳一』（桜楓社）の「はしがき」の冒頭で、「青表紙系の版本中では最善本と称せられる首書源氏物語の本文」という、定説化されつつある一般的な評価は再検討を加えられる必要がある。『源氏物語の本文と享受』（和泉書院・282頁）では、「青表紙本群類」というまとめ方をしたが、そこで示した矢印の関係は、やはりここでも、その妥当性を示している。系統的關係を逆にたどっていくことは、かなり困難なことではあるが、桐壺の巻については、その見通しだけはつけておいた。大島本に対する「首書」本の異文の調査という限られた資料の調査からも、宮内庁書陵部蔵青表紙証本、穂久邇文庫蔵本、各筆源氏（御物本）などと、意外に多くの共通異文を持っているが、それらの諸本はまた固有の異文を持っている。混成と混態とがくり返され、文献学的な原

型さえ校訂本文である源氏物語の本文は、そうした異文を集積していくことによって、直接的か、間接的かの異文の形成の相違を注意深く見きわめながら、やはり本文の遠近度を測定し、縁故関係を推定していかざるを得ない。そうした異文についての計量的処置とともに、重要異文についての徹底的な分析をからませていこうとするのが、『源氏物語の本文と享受』の方法であり、それなりの成果を問うている。ただ、それを関根氏のごとく読みとっていただけはないというのは、また別の問題である。

『首書』本の異文が、校合に用いた二十本と共通異文を形成する場合の大きな特徴は、共通異文のあらわれ方が九十四の類型に達するという点である。他の諸本と共通異文を形成する百三十四例中、『湖月抄』のみと単独で共通異文を形成する二十三例を除く、百十一例は、「B群 第二類」で示した二十四例が九つの類型に、「C群」で示した四例が二つの類型に集約されるほかは、すべて一例が一つの類型を形成している。共通異文数に対する『首書』本と『湖月抄』の親近度は八三・六%、『首書』本の独自異文率は、七・五%に過ぎない。これらの事實は、『首書』本の本文が、校訂にかゝる混成、混態を経た系統論的にきわめて不純なものであることを示している。そして、吉岡氏が指摘されるように、両本の関係は、共通の原型を有したか（氏は「兄弟関係」といわれる）、いずれかが原型であったか（「親子関係」といわれる）、という関係を想定させるものである。

II

以上、『首書』本の本文を、『大成』底本の太田本と対校し、その異文に対する校異を、『大成』に所収されていない諸本を含め、二十本に亘って比較し、検討を加えてきた。『湖月抄』の本文との関係も、そういう視点からとらえたも

のであるが、それら以外について、両本を直接対校することによって、更に本文の系統論的性格を明確にすることができ。上段の見出しは「首書」本の本文、下段は「湖月抄」の本文で、それと共通異文を有する諸本との関係を示すと次のようになる。注記のないものは諸本が「首書」本の本文と同じことを示す。

D群 「首書」本に対する「湖月抄」の独自異文と、それが他の諸本と共通異文を形成する異文

⑥みちに——身に 肖、証、穂・河・別・⑨かねのみさき——かねのみさきを 肖、証、穂・河・陽・国、麥、阿
・⑩しらせたてまつりて御すくせにまかせてみたてまつらむにも——しらせ奉らんにも 三・⑮いひなげくほど——
いひなげく 肖、証、穂・河・陽へ見セ消チ「ほど」三〇・⑳おほせらるる——おぼせらるる「湖」独自異文。
へ「おほさるゝ」三〇・㉑わかきもの——わかもの 三・へ補入「き」池〇・㉒はやうせ——はやううせ 肖・△は
やくうせ」証、穂・河・麥、阿、保・。

⑤仏をがみ——仏ををがみ「湖」独自異文。⑤いふを——いふ「湖」独自異文。「いふも」陽・⑥めでたし——め
でたく「湖」独自異文。⑥なきとあるとは——あるとなきと・「湖」独自異文。「あるとなきとは」三、穂・河・麥、
阿・「あるとなきとの」陽・⑦めるが——めるに 証、穂・御、宮、平、鳳、尾、大・陽、麥、阿・「める」肖・保
・⑦見侍る——みはつる 三、証、穂・宮、平、鳳、尾、大・麥、阿・「え」見セ消チ「は」補入」池・「みはて
つる」肖・「見えつる」横・七・陽、保・「みはつか」御・⑦右近ばかりを——そこばかりを 肖、証、河・麥、阿
・⑧したてたり——したり・「してたり」三・⑨うちあはぬ——うちあらぬ 横・「わ」見セ消チ「ら」補入」池
・「は」見セ消チ「ら」補入」三・「(なをくて)あらぬ」御、七、平、鳳、大・「かくてあはぬ」宮、尾・「(猶
も)あらぬ」陽・⑨うらやみなく——うらみなく 池、三・保・⑩まいらせたる——まいれる 証、穂・河・保・「も
てまいれる」陽・⑩又あれ——あれ 三、穂・河・別・⑩すぢこそ——すぢこそは 陽・

青表紙本系統の大島本を介することなく、「首書」本と「湖月抄」の本文とが異文を形成するものは、以上の二十例である。これを系統的に分類して示すと、次のようになる。

- (一)、青表紙本・河内本・別本系統の諸本と共通異文を形成するもの……………9
 - (二)、「湖」の独自異文……………5
 - (三)、青表紙本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………4
 - (四)、青表紙本・別本系統の諸本と共通異文を形成するもの……………1
 - (五)、別本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………1
- これらを、系統的諸本との関係という視点から延数で集計し、それを百分率で示すと、次のようになる。上段は「湖」の独自異文を除く異文数十五、下段は異文延数三十四に対する百分率である。

(A)、青表紙本 14 九三・三% 四一・二% (B)、別本 11 七三・三% 三二・四%

(C)、河内本 9 六〇・〇% 二六・五%

これを、関与する諸本という視点に立って、諸本ごとく還元し、その共通異文数と百分率とを示すと、次のようになる。上段は異文数十五、下段は異文延数百十四に対する百分率である。

(A)類、青表紙本系諸本

(イ)証・穂・8 五三・三% 七・〇% (ロ)三・5 三三・三% 四・四% (ハ)肖・3 二〇・〇% 二・六%

(ニ)横・池・1 六・七% 〇・九%

(B)類、別本系諸本

(イ)麥・阿・7 四六・七% 六・一% (ロ)陽・6 四〇・〇% 五・三% (ハ)保・5 三三・三% 四・四%

(二) 国・3 二〇・〇% 二・六%

(C) 類、河内本系諸本

(イ) 宮・平・鳳・尾・大・9 六〇・〇% 二六・五% (ロ) 御・8 五三・三% 七・〇%

(ハ) 七・7 四六・七% 六・一%

『湖月抄』の『首書』本に対する独自異文は五例に過ぎない。㉔は、語法的に誤りがあり、同文系では三条西家本が正格。㉕は、同語「を」の重複、散文化して簡潔な表現から遠退いている。㉖は、逆に「を」がなく、文が終止し、簡潔でかえって余情的な表現。㉗は、並列か修飾格かの違い。同頁の別の異文は、語順の倒置で三、穂・河・麥、阿などの諸本に近いもの。片々たる語の相違で、『首書』本の、大島本に対する独自異文十例と、本質的に異なる異文とは考えられない。また、『湖月抄』の独自異文は、青表紙本系諸本と最も親近関係が深く、九三・三%と、その親近度は最も高く、以下、別本七三・三%、河内本六〇・〇%の順で、諸本の親近度は、ともにかなり高い数値を示している。そして、この事實は、『湖月抄』の本文が、校訂にかかわる系統論的に不純な本文であることを示すものである。

青表紙本系では、「B群」「C群」と同様宮内庁書陵部蔵青表紙証本、穂久邇文庫蔵本が八例、五三・三%と最も親近度が高い。この傾向は、「B」「C」「D」各群に一般的に見られる傾向であり、かつ横山家本、池田本が一例、六・七%と一桁台で、他の諸本と一線を画することができる点も、ほぼ同一である。また、「B群」と同様、青表紙本系に次いで親近度の高いのは別本系であり、麥生本、阿里莫本両本が最も親近度が高く、陽明文庫本と単独に共通異文を形成する㉘の例に見られるように、同本との親近関係を指摘できる点も共通している。最も近親関係の低いのは国冬本で、三例、二〇・〇%で、別本系では、ここにも一線を画することができる。この点も「B群」と「共通」する。最も親近関係の低いのは河内本であるが、「B群」で指摘した二つの点は、「D群」においても顕著な傾向として同様に指摘することができる。この事實は、

「首書」本と「湖月抄」の本文が、青表紙本系、別本系、河内本系諸本に対してほぼ等距離に、しかもきわめて近似の系統論的關係に置かるべきものであることを示している。

このように、「B群」「D群」の間では、数値はきわめて近似し、同様の傾向を示しているのに、「C群」においては、微細な点で整合しない部分が存在する。「C群」は、「首書」本の大島本に対する異文が「湖月抄」の本文とは無關係に、他の諸本と共通異文を形成する二十二例である。「湖月抄」本文との断絶、絶縁という「首書」本の異文群が、このような本文の性格を有することは、本文系統論上の位置づけに、きわめて重要な問題を示唆しているように思われる。だが、これらの問題に立ち入る前に、両本が異本として注記する本文がどのような系統論的性格をもつものであるかを調査、検討する必要があるし、各群に亘る重要異文を徹底的に検討する必要がある。

以上の集計は、「首書源氏物語 玉鬘」（和泉書院）の「補注」によった。三か月ほどを費しての校合で、精確を期しての作業であったが、本稿執筆の段階で再度「首書」本と「湖月抄」の本文とを直接対校し、その異文を二十本に亘って再調査しながら、「補注」に検討を加えた。その結果、責任校了としたものが訂正されなかったり、誤読、誤校とすべきものも若干存在した。本稿は、「補注」を訂正したものを資料として執筆した。増補、訂正部分を示すと、次のごとくである。

玉鬘卷「補注」増補・訂正部分（↓印に訂正）

4 (5) 「おぼえ」横、池・陽、国・湖。 ↓大島本その他の
諸本「おぼえ」。

19 (2) 河内本と同じ異文は、東・証。 ↓河内本と同じ異文

は、証。

25 (4) 河・陽、保。 ↓河・陽、保。大島本その他の諸本
「思わひて」。

26 (3) 大島本「思はれむを」。 ↓大島本その他の諸本「思
はれむを」。

28 (3) ↓全文ヲ削除スル

33 (2) 証・湖。「……けらる」肖、三、証・湖・河・別。↓

↓証・東・湖。「……けらる」肖、三・河・別。

33 (2) 尾。「そこと」池・湖・→尾・湖。「そこと」池・

37 (9) 湖。↓湖。大島本その他の諸本「いたしたてたてま

つる」。

40 (12) 三、湖。↓三・湖。大島本その他の諸本「など」。

本項ノ後ニ行ヲ改メ次項ヲ増補スル

41 (4) 「外に」湖 ∧「とに」∨。大島本その他の諸本「ほ

かに」。

46 (4) 河・国・湖。↓河・湖。

保・∨↓保・∨大島本その他の諸本「ナシ」。

48 (7) 河——麥、↓河・麥、

51 (8) 本項ノ後ニ行ヲ改メ次項ヲ増補スル

52 (3) 「ふかゝめるを」『首書』独自異文。大島本その他の

諸本「ふかゝめるに」。

61 (8) 東・子。↓東・湖。

65 (6) 穂・湖。↓穂。

66 (12) 本項ノ後ニ行ヲ改メ次項ヲ増補スル

67 (4) 「みたてまつりつけ」池、三・湖。「みつけたてまつ

り」陽・大島本その他の諸本「み給へつけ」。

84 (2) 穂。↓穂。大島本その他の諸本「などは」。

95 (11) 肖、穂・麥、阿・湖。↓肖・麥、阿・湖。

104 (10) 大島本その他の諸本「ぬへく」↓削除スル

105 (4) 肖、証、穂。「ナシ」三・↓肖、証。「ナシ」穂、

三・

『首書』本の頭注、傍注として諸注の引用を除いて異本について注記するものは十七例で、その方法には二通りがある。異文をあげるもの十三例、あげないもの四例である。異文を注記しないで、その範囲だけを示している四例は如何なる意図、状況のもとになされたものか、もとよりそれを知る手がかりはない。「補注」62 (5) に注記した「ねんず」は、傍注に「イ」とある。異本の存在することを注記したものか、異本によって校訂した本文であるかを注記したものか、いずれかを示すものと推測されるが、一般的な注記の方法としては前者と考えるべき異文であろう。この異文は、大島本と「大成」青表紙系に所収された四本、「湖月抄」の六本に存在する。「むかしものかたりねんすなとしつゝ、

とある『首書』本・大島本等のこの本文は、証・穂・御・七、宮・平、鳳・尾・保、麥・では、「むかしものかたりし
くらす」となっている。さらに、大「むかしものかたりなとしくらす」。阿・「むかしものかたりしらす」。陽・「むかし
ものかたりしたりす」・となっている。さすれば、『首書』本の注記は、同文の六本以外のこれらの諸本を比較してい
たことを示すもので、『首書』本の本文の系統は、青表紙本系の大、横、池、肖、三・及び『湖月抄』の本文と同一で
ある。

『首書』本「19（10）「さすらへ給て」の「て」を「イ」と傍注するが、校合に用いた二十本のなかで、この部分に
異文をもつ諸本は存在しない。「さすらへ」の異文注記を誤ったものとしな以上、二十本以外の諸本を比較してい
たことになるが、第二類にもこの例が存する。

「46（4）」は「補注」にも異文を注記したが、「はかなき世をおもふにあへなくもやいはんとてかけんもゆゝしくて」
とある『首書』本の本文の傍注に「イ」と注記する。証・河・湖・が『首書』本に同じ。但し、『河』の一部諸本には
若干の異文が存在する。「はかなきよを思にあえなくもやおもはむとかけてもゆゆしくて」穂・「はかなきよにあへ
なくやいはんといひはてす」池・「はかなきよを思ふにあやなくもやいはんとてかけんもゆゝしくて」穂・「はかなきよ
を思ふにあへなくもやいはむとてかけむもゆゝしく」七・「はかなき世を思にあえなくやいはんとゆゝしくて」陽・
「はかなきよ思あえなうもやいはむとかけんもゆゝしくて」保・「はかなき世を思ふにあへなくもやいはんとゆゝしく
て」麥・「はかなき世を思ふにあへなくもやいはんとゆかしくて」阿・大島本その他の諸本にはこの異文は存在しない。
「102（9）」に「ともイ」とある『首書』本の本文「たるとも」と同じ異文は、穂・河・陽、保・湖。「たるともを」麥、
阿。異本「たる」に同じのは、大、横、池、肖、三、証・国。『首書』本の校訂者はこの七本の側に異本の存在を見て
いたことになる。

これらの四例を「E群 第一類」として分類し、比較検討する。「19(10)」は、調査した二十本に校異を認めず、疑問が残るのでしばらく検討から除外する。「62(5)」に「イ」と注記する異文と同じ本文をもつ諸本は、大、横、池、肖、三・湖の六本である。「102(9)」のそれは指摘した五本。「46(4)」のそれは、証・河・湖であり、池田本・穂久邇文庫蔵本及び国冬本を除く別本系諸本もこれに近く、しかも、この部分の異文は玉鬘の巻を通じて、最も長文で重要な異文である。しかし、重要異文や部分だけをとりあげて、本文系統論に及ぶ無謀さについては、既に吉岡曠氏が指摘されているごとくである。氏の警鐘をふまえないで、文献学的な研究成果を期待することができないことについては、別に述べた。関根賢司氏は、

著者の方法は、見られるように、異文についての徹底的な計量的処置である。阿部秋生や吉岡曠の、陽明文庫本や麦生本の位置づけに対する著者の異論について、その当否を判断することは、両者とは別の視点・方法を導入するの
でなければ、にわかにはできかねるが、きめこまやかな読みにささえられた阿部秋生の説得点な方法に対して、著者
の計量的方法は、異文や共通異文についての概念規定に曖昧さが残って、必ずしも読者に対して説得的ではないよう
に思われる。(「国学院雑誌」昭和六十二年三月第八十八巻 第三号)

と「書評」で述べられているが、従いがたい。冒頭の部分とか、異文のたて混んでいる部分とか、あるいは、重要異文の部分的な対校を系統論に敷衍しようとする演繹的方法を「きめこまかな読み」「説得的な方法」と評するが如き、何が正鵠かを知らぬ徒にあえて与しようとは思わない。だが、以下の具体的な論証を通して間接的に反論を試みることになるだろう。わたくしの方法によって分類、集計する異文は、語を基準単位とするが、諸本間の異文のあらわれ方を考慮して、文節あるいは語句を単位として整理せざるを得ないものがある場合はそれに従っている。それらは諸本間の異文のあらわれ方によって相対的に決定されていくもので、恣意的な処理を許すものではない。また、ほぼ共通する異

文についても、諸本間の異文の形成上重要語句を含むか、含まないかによって決定されるもので、曖昧さや、恣意的な解釈を許すものではない。注意深く異文の処理を比較、検討していただければ、機械的に文節によって処理していく方法ではなく、異文として意識された語句を明確に識別しようとする異文であり、共通異文であることは明らかである。それは、曖昧でも恣意的でもないはずである。

テキストを「取り扱う」こともできず、それをしようともしない、また、した経験もなく、本文の「混成」と「混態」、「原本」と「原型」の相違さえ区別し得ない研究者や、あるいは語誌的研究を国語学の一領域であることを知らぬ顔に、研究業績を云々するがごとき、厚顔無恥の輩が輩出する現代とはいったい何なのか。だが、この問いは、やはり、自身に対しても問わなければならない問いであった。そして、それが、一部の風潮でもあるところに、残念ながら問題があるように思われもする。

「E群」第一類の「62(5)」、「46(4)」には、青表紙本系では、大、横、池、肖、三、対、証、穂という本文の親近関係における対立が見られる。特に、証、穂の二本は「首書」本と対立する異文を形成したり、同系、同文に近い異文を形成したりしている。「102(9)」には、証、穂の対立が見られる。これらの事実を、「首書」本の系統論的不純さと、校訂本文としての性格を明確に示すものであるが、「湖月抄」本文が、三例いずれも「首書」本と共通異文を形成しているという厳然たる事実が見られる。このことは、「B群」との関連のなかに捉えられなければならない問題であるが、吉岡氏は「首書本ないしはその親本を、近世以降の流布本文の淵源とみなすことが可能になるだろう」(「首書源氏物語 末摘花」和泉書院 102頁)とされ、野村氏は、「湖月抄」と「首書」本とが、「ほとんど並行して刷られていたらしい」(「首書源氏の初刷本と」或抄)について「研究と資料」第十七輯)とされる。両本の前後関係、影響関係は、「首書」本の奥書を信じれば、きわめて明解であるが、やはり、問題があるように思われる。これらの系統論的問題に

ついでに、全体の資料を比較検討した上で考えることにする。

「E群」第二类として、「首書」本の異本についての注記で、その異文をあげる十三例について、比較、検討する。但し、十九頁頭注は、河内本の本文をあげるに過ぎないから除外する。頁数の下の本文は異文として注記されたもの、略号は、それと共通異文を形成する諸本を示す。対校した二十本に共通異文が存在しない場合は「ナシ」とする。

E群・第二类・「首書」本の異本についての注記で、異文をあげるもの

- ⑬ つたへ——ナシ・⑭ た——ナシ・⑮ け——大、肖、横、証、穂・河・麥、阿・⑯ の——平・⑰ う——肖・湖・(く
- 証、穂・河・麥、阿、保)・⑱ ま——大、三、横、証、穂・御、宮、平、鳳、尾、七・国、保・⑳ 給——肖、証
- 穂・河・(給つれ——陽)・㉑ そこはかり——肖、証・河・麥、阿・湖・㉒ うちあらぬ——横・湖・(「あらぬ」の
- 異文をもつもの——穂・御、七、平、鳳、大・陽)・(「うちあらぬ」「ら」見セ消チ「わ」補入——池)・(「う
- ちあらぬ」「ら」ノ石傍ニ平列シテ「は」ト書入レアリ——三)・㉓ も——大、横、池、三、証、穂・河・別・㉔ か
- 大、横、池、肖、三・㉕ はた——大、横、池。

「首書」本の校訂者が、異本としてあげた十七例のうち、対校することができた十六例について校訂者一竿斎が、そこに異本の存在を示し、異本の本文を示した「異本」とは、いったいどのような本文の特徴をもつものであったらうか。先ずそういう点を考えてみたい。「異本」は、比較、調査することができた二十本の諸本と、どのような関わりを持っているか、集計すると次のようになる。第一に系統的に分類する。

- (一)、青表紙本・河内本・別本系統の諸本と共通異文を形成するもの…………… 4
- (二)、いずれとも共通異文を形成しないもの…………… 3
- (三)、青表紙本・別本系統の諸本と共通異文を形成するもの…………… 2

四、青表紙本系統の諸本・「湖月抄」の本文と共通異文を形成するもの……………2

五、青表紙本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………2

六、青表紙本・河内本・別本系統の諸本、「湖月抄」の本文と共通異文を形成するもの……………1

七、青表紙本・河内本系統の諸本と共通異文を形成するもの……………1

八、河内本系統の諸本のみと共通異文を形成するもの……………1

次にこれらを、系統論的諸本との関係という視点から延数で集計し、それを百分率で示すと、次のようになる。上段は異文数十六、下段は異文延数二十九に対する百分率である。

(A)、青表紙本 12 七五・〇% (B)、別本・河内本・7 四三・八% 二四・一%

(C)、「湖月抄」3 一八・八% 一〇・三%

これを、関与する諸本という視点に立って、諸本ごとに還元し、その共通異文数と百分率とを示すと、次のようになる。上段は異文数十六、下段は異文延数百八に対する百分率である。

(A)類、青表紙本系諸本

(イ)証・大・横・肖・7 四三・八% 六・五% (ロ)穂・池・三・5 三一・三% 四・六%

(B)類、河内本系諸本

(イ)平・7 四三・八% 六・五% (ロ)御・七・宮・鳳・尾・6 三七・五% 五・六%

(い)大・5 三一・三% 四・六%

(C)類、別本系諸本

(イ)麥・阿・国・4 二五・〇% 三・七% (ロ)保・3 一八・八% 二・八%

(ハ)陽・ 2 一一・五% 一・九%

(D)類、「湖月抄」及び独自異文(該当諸本のないもの)

(イ)「湖月抄」・ 3 一八・八% 二・八% (ロ)独自異文・ 3 一八・八% 二・八%

「E群」第二類の、異文を示して諸本と共通異文を形成する十例について、諸本との重なりを図表化して示すと、次のようになる。

⑩	⑨	⑧	⑦	⑤	④	③	②	①	④	④
大・	大・	大・		肖・	肖・	大・	肖・		大・	大・
	横・	横・	横・			横・			横・	横・
		証・		証・	証・	証・			証・	証・
		穂・		穂・	穂・	穂・			穂・	穂・
池・	池・	池・							池・	池・
	三・	三・				三・				
		河・		河・	河・				河・	河・
						平・			平・	
						御・				
						宮・				
						鳳・				
						尾・				
						七・				
		別・								
				麥・					麥・	麥・
				阿・					阿・	阿・
						国・				
						保・				
			湖・	湖・					湖・	湖・

備考：

④音便形ではなく、もとの形で同語の異文のあるもの、証・穂・河・麥・阿、保。

⑦尊敬語「給」を伴うが「給つれ」となっているもの、陽。

⑩「あらぬ」の異文をもつもの、穂・御・七、平、鳳、大・陽。

このように、「首書」本が、異本として注記する本文の顕著な特徴は、「B」、「C」、「D」群で、きわめて低い親近關係を示して疎遠であった横山家本が、大島本、池田本などを伴って、高い数値でクローズアップされてくることである。そして、こういう点に視点を据えると、「首書」本もその本文を注記する「異本」も、青表紙本系統に属するものであるという論点を前提にしなければならぬように見える。だが、それらは「青表紙本群類」として、混成、混成現象をもつ、系統的にきわめて不純な本文的性格をもつものとして扱う必要がある。そのことは、河内本以下の図表が示してもいる。上野英子氏（『近世初期源氏物語版本の本文』）「研究と資料」第十七輯（昭和62年7月）の研究は、従来の本文研究で、指摘されながらも等閑視されてきた、近世初期の源氏物語版本の本文研究を通して、系統論に鋭く迫られたもので、きわめて高い研究史的業績をもつものと評価されるが、氏は、帚木の巻について、

一、慶長本・伝嵯峨山・慶安本の三本は、各々個性をはらみながらも、いずれも三条西家本に近似した本文を有していること。

二、特に慶安本については、首書源氏とも類似性があり、或は同書を校合に用いたかもしれないこと。

三、また慶安本以後に出版された万治本と湖月抄とは、ほぼこの慶安本と軌を一にしているらしいこと。

と指摘されている。源氏物語の本文は、巻々によって本文の事実を集積し、検討していかねければならないが、この発言は、玉鬘の巻についても示唆するところが多い。一帖全体に亘る帰納的、精確な調査にもとづかれた論証であり、方法であるところに、やはり、検討すべき多くの提言が見られるように思われる。（未完）